



目次

琉球占術師アキラ	1
----------------	---

琉球占術師アキラ

2015年9月13日。僕は星崎詩音と沖縄へ旅立った。東京は中秋の名月が2週間後に控えて限定商品が並び始めている。すっかり秋めいて少し肌寒いと感じる日も多かった。沖縄に着いてからというものラフなTシャツ一枚でも快適に過ごせるほど気温が暖かくて南国特有の癒しとフルーティな薫りに極上のリラクゼーションを感じている。沖縄県は琉球王国という独立した国家だった歴史があるために、星崎詩音はまるで新婚旅行へと旅立つようなロマンティックな言葉遊びに酔いしれていた。南風に誘われるかのようなミッドナイトフライト。

詩音は琉球占術の初級鑑定師で、僕は上級鑑定師のスキルを持っているから、いちおう大学卒業して間もない23歳の星崎詩音よりかは人生経験も多いのだし、琉球王国では星崎詩音の面倒を観るように占術の師匠である佳子先生から厳しく言われていた。

詩音是那覇にある5つ星ホテルの予約をしており、僕は詩音が言うがまま付いてきただけなので、反論する余地もなく経済界に大きな影響力を持つ星崎財閥の一人娘である詩音に喜んで貰えるように策を練っていた。

「アキラお腹空いたね。わたしステーキ食べたい。どこか良い店知らない？」

「ステーキっても詩音ちゃんのような御令嬢を連れて行けるようなお店は知らないなあ。ステーキハウス88とかは有名だけど詩音ちゃんが気にいるかは解らないなあ」

「チェーン店でも別に構わないよ。わたし普段はラーメン屋さんとかも一人で入れないし、むしろ高級なお店は飽きちゃってるから」

「せっかくの詩音ちゃんのお誕生日なのだから、雰囲気の良いお店に行こうよ。ステーキ88も美味しいけれどさすがに誕生日に行くようなお店ではないからさ。今スマホで調べるから待っていて」

僕はジーンズのバックポケットからスマホを取り出して、那覇周辺の3つ星レストランを検索した。

すぐ隣で星崎詩音もスマホをいじくり出して彼女のシャネルの香水が色香を増すようにしてセミロングの髪の毛をかきあげる仕草に月明かりのような色気を感じる。

ホテル内にあるミラノグリルだったら誕生日祝いには最適かもしれない、僕は直接店に電話して21時半に2名の予約を入れる。

ハイアットリージェンシーのスイートルームには詩音が那覇空港で買ってきたお土産以外には特別な荷物は無かった。そもそも17時に東京の帝国ホテルで面接をする予定だったのだが、星崎詩音は僕を見つけるなりすぐさま琉球王国へと旅立つと言ってそのままハイヤーに押し込められて、今僕たちは那覇にある5つ星ホテルにいる。星崎詩音

はディーゼルのジーンズにヒステリックグラマーのロングTシャツというラフな格好をしており、ミュージシャン志望の彼女らしく指輪や時計などの小物類にも独特のセンスを感じられる。詩音のパワーストーンはモテブレスの定番石ガーネットと恋愛運を司るローズクォーツの水晶結界ブレス。学生時代から相当モテていたらしいがさらにモテるようになってどうするんだ？ と僕は褒めながらツッコミを入れると詩音は得意な顔して鼻を少しヒクヒクさせた。その表情がディズニー映画のヒロインにも似ていて僕は過去に想いを馳せる。

827という数字と111に秘められた謎を追い求めて単身琉球王国入りしたいつかの誕生日の翌日、その日は幼馴染の人気音楽家ユニット、ダブテックの元宮の誕生日であった。彼は誕生日が一日違いというだけでなく、同じB型であったり出席番号が一つ違いであったり実家が近かったこともあって彼が中学2年生の時に引っ越すまでは小学校一年生の時から換算して計8年間、通学を共にした。彼が25歳の時に出したCDアルバムは250万枚を悠に超える大ヒットを記録して紅白歌合戦に初出場したりバンドマンの聖地である日本武道館での単独ライブをやるまでに大躍進を遂げた。

若くして成功者の仲間入りを果たした彼の生き方には間違いなく仏法思想が身体の隅々にまで染み渡っている。同じ仏法を信仰している僕は、なぜ元宮だけがこんなにも早く結果を出してしまったのだろうか勝手に比較しては落ち込む暗い時期を経験して、占い師になった。

琉球占術は東洋占星術、数秘術、古典風水に心理学の要素を加えて出来た沖縄発祥の占いだ。

僕は母親が沖縄県出身なのですぐに興味を示してマジカルカラーで運気があがるのかをパチスロで試すことにした。教えて貰ったマジカルカラーを着てマジカルナンバーを頼りに台選びをし、5000円を握りしめて勝負をしていた。神様は必要な時必要なだけの金額はすぐに与えてくれる。この宇宙の法則が正しければ、または僕が琉球占術にご縁があれば初級鑑定師になる3万円の費用くらいパチスロで稼げるはずだ。今から考えればとてもじゃないけれど、論理的ではなかったその微かな希望だけを胸に秘めて運命に身を委ねることにした。結果は5万円の勝ちだった。初級鑑定師の費用とパワーストーンを買ってお釣りがくる。ギャンブルで勝ったあぶく銭などすぐに勉強への投資に変えなければまっとうに生きていくことができない。すぐさま僕は占い師の勉強に投資した。母親の故郷沖縄発祥の占いと父方のご先祖様から頂いた橋本章という名前、占い師として様々な人生に触れることでいち早く小説家になる夢を叶えたかった。それこそが37歳の若さで亡くなった兄へのご供養になるはずだと信じていたからだ。

予約したお店まではエレベーターに乗ってすぐだったが、せっかく国際通り周辺にホテルを借りているのだし、沖縄タイムを満喫するために国際通りを歩くことにした。

民芸店にステーキ屋、数えきれないほどのパワーストーン屋からシルバーアクセサリーのお店がひしめきあっていて、街路樹の椰子の木の葉が月明かりの下、優しく二人を照らし出すように微かに揺れていた。

ここは東京での仕事疲れを癒やしてくれる南国沖縄。通りにはマンゴーや塩バニラのアイスクリームを食べている女の子同士の観光客や瓶ビールを飲みながら歩いている彫りの深い地元民、中国語や韓国語など多言語が飛び交う中で賑わっている。ドンキホーテ

の手前の路地を曲がると僕たちの目的地であるレストランへと繋がっている。詩音は誕生日ということを知っていたのだろうか。ステーキ88で誕生日祝いをしたなんて、後で上司に報告をしたら間違いなく怒られるであろう。経費で落ちるとかは全く関係ない。大財閥の娘である詩音さえ乗り気になってくれれば東京の一等地にミラクルスポットの店舗が構えられるはずだとみんな期待している。東京に実店舗ができれば沖縄出身の絢香やアイドル占術師の恭子も東京へ行く口実ができる。何があっても粗相を働いてはならない。

詩音は先ほどから僕の手を優しく掴んで手と手から伝わってくるその暖かな波動に僕はなんとも言えない癒しを感じていた。紺色のジャケットにはマジカルカラー藍色の詩音らしくところどころに星のモチーフが隠されていて、名は体を表す、とは本当のことなのだとは痛感していた。

国際通りの散策を終える。ホテルのロビーを抜けて、エレベーターで18階まで登る。目的地であるミラノグリルに到着すると、若い女性スタッフが丁寧に対応してくれて、ラストオーダー間際にすみません、今日は彼女の誕生日なのです、と僕が女性店員に説明すると、そうなのですねでは、今日はできる限りサービスさせていただきます、夜景が見えるお席と個室どちらが良いですかと尋ねられたので、夜景が見える席に案内してもらうことにした。

窓ぎわのテーブル席には創作イタリアンレストランといったベージュ色のテーブルクロスが敷かれており、おすすめのコース料理を注文した。飲み物はワインでも飲みたかったのだが、僕がお酒に強くないのと詩音もソフトドリンクが良いというので、ジンジャーエールとコカ・コーラにした。

「昔さ、横浜のシティホテルでウェイターをやっていたことがあるんだ。横浜っても中華街なんだけどね。」

「へえ、アキラって色んな職種を経験しているのね。さっき、飛行機の中ではセラピストもやっているとか言ってたけど、生活がきついのか？」

「暮らしは楽ではないな。最低でも月に20万円は必要なのに、占い師の給料だけじゃ不安だからセラピストのお仕事もしているけれど、同時に小説も書いているから資料や取材費にかけのお金を捻出するのにいっぱいだよ」

「でも、アキラのお母さんって沖縄では有名な財閥の娘さんなんですよ？ いざとなったら親戚に頼ればいいじゃん」

「そんなん言うけれど、いつまでも親戚にばかり頼ってられないよ。けれども、自由なお金がないぶんだけ、心はいつも自由だよ。なんか大失敗してもこれ以上落ちようがないの知っているからさ。小説家なんて所詮は最後に選ぶ職業だよ。詩音ちゃんはどうなの？ ミュージシャンになる夢」

「わたしはアキラみたいなギター弾ける恋人候補がいて、ライブハウスとかで二人でジャズでも演奏できればもう満足なのよ。お金の苦勞からは解放されているけれど、母親が結婚を許してくれるような理想の高い男子は見つかりそうにないからさ。アキラと一緒にいるってことが私の夢の一つだよ」

「うれしいけれど、どうしてそんなに僕にこだわるの？」

「アキラはギター弾ける以外にも、占いもできるしマッサージもできる。そして、何よ

りもアキラの自叙伝を見せてもらったけれど文章表現が豊かで神秘的な事象に深い造詣がある。これって女子の好きなジャンルを全て網羅しているというか、私が興味あることを全てやってくれている。占いでは、アキラは私の運命の人だもの。出会い方が占いだっただけで、これから徐々にお互いのことを知っていく度に離れたい関係になると思うわ」

詩音は、ジンジャエールを飲んだ。僕は、詩音のペースに合わせてコカ・コーラを口にする。前菜の冷製オードブルがテーブルに運ばれると、詩音はナプキンを首元に巻き付けて、アキラも真似するようにと母親のような口調で言った。僕は汚れても良いような服装で来ているので、ナプキンを首に巻くのは窮屈に思えたが、詩音の言うとおりにした。

「アキラ、今日はもう寝るだけなのだから、少しお酒飲んでも良いよ」

「ありがとう。では、シャンディガフでも頂こうかな」

僕はすっと右手を挙げてウェィターを呼ぶ。ジンジャエールのお替りと、シャンディガフをオーダーすると、黒服に身を包んだ若い女性店員が、オーダーを確認してそれを了承した。

詩音が化粧を直しに席を外すというので、僕も2階にある喫煙所へ向かおうとしたのだが、詩音の誕生日とあってもう少し、窓際の席から夜景を楽しむことにした。

運命の人とはいったいどういう関係性のことをいうのだろうか。琉球王国の伝説としては、『羽衣伝説』である銘苺子(めかるし)が知られている。

ある村で農作業を終えたばかりの銘苺子という青年が、水を飲もうとして泉へと足を踏み入れたところ、先に、この世のものとは思えないほどの美しい天女が水浴びをしていた。農夫は天女の羽衣を隠してしまい、天に帰れなくなった天女と地上で暮らすことになった。

夫婦となった農夫と天女の間には2人の子供が生まれた。その噂を聞きつけた王族が天女の子供を引き取るようになった。二人の子供の姉は、城内で育成し弟は成長したら取り立て、銘苺子には士族の位【王を支える武士の階級】を与えることにしたという。それを聞いた銘苺子は喜び、家路につく。しかし、天女は羽衣のありかを探し出してしまい天へとかえって行ってしまった。

詩音の羽衣を隠してしまえば、銘苺子の伝説のように、子供たちが出世するかもしれない。

けれども、運命をかたくなに信じる詩音にとって、羽衣伝説はおとぎ話のようであり、彼女が期待している運命の人とは、占いというツールを通した相性のお話であり、それを実験によって、証明しようとしているのである。運命の人がいることを信じて生きてきた僕たちにとって、世の中にはセックスから始まる恋愛だってあるというのに、占い結果から始まる恋愛の行く先がいつどこで終着駅へとたどり着くのか解らないまま、心の奥底に眠る純粋さを失わずにこうして疑似恋愛を楽しんでいるのだ。

詩音は化粧室から戻ってきた。夜景に酔いしれながら運命という概念に考えを巡らしていた僕にとって、今、目の前にいる詩音はとても幼くみえた。さあ、前菜でも食べよ

うとって、冷製のオードブルに舌鼓をうつ。ビールとジンジャエールをミックスさせたシャンディガフを飲み、ひと時の安らぎを確かに感じていた。

「アキラって食べ物食べている時は本当に無邪気な小学生みたいだね」

詩音はオードブルを口にしながらにっこりと微笑む。

「35歳にもなると、性欲よりも食欲のほうが勝ってしまうみたいだ」

僕は色とりどりのオードブルを見ながらその可愛らしい盛り付けに、昔、子供のころに食べたお子様ランチを思い返していた。

「詩音ちゃんはおふくろの味が一番おいしい？」

「そうだね。やっぱりおかあさんが作ってくれる肉じゃがとかカレーライスが無性に食べたくることが多いよ。今は、一人暮らしだから自分でも料理するけれど、やっぱり母親が作ってくれる料理が世界で一番美味しい」

「詩音ちゃんが作る料理、食べてみたいな」僕は素直に思ったことを口にした

「アキラは婚約者だから、いつでも遊びに来ていいよ。新宿の高田馬場にあるタワーマンションに住んでいるから、今度ギター持って遊びに来てよ」

「高田馬場なんだね。有名私大とかもあって学生の街かと思っていたけれど、タワマンがあるのは知らなかった。まあ、僕の地元の蒲田でも庶民の町だけれど億ションとか立っていて、街並みもだいぶ変わりつつある。昔は治安が悪くてね。ゴミもそこらかしこに捨てられていて、汚かったし、不良やヤクザも多かったから殺人事件とかも頻繁に起きていた。

今となつては、だいぶ街並みも民度も高くなりつつあって、平和な世の中になったなとつくづく思うよ」

シャンディガフを飲み干して、ウェイトレスに同じものをオーダーした。詩音は夜景を見ながら、少し思いつめた表情を浮かべていた。意を決したかのように詩音は僕に問う。

「そういえばアキラって彼女いるの？」

詩音はインターネット経由で僕の誕生日を知り、占術師のアドバイスによって僕のことを運命の人だと直感したらしい。詩音から彼女の有無を聞かれて僕の脳内には沖縄に置いてきぼりにした占術師の絢香の顔が浮かびあがった。あの夜のことは、気の迷いだっただか、ひと時の慰安だったかもしれない。僕は詩音に彼女はいないとだけ告げた。

「彼女いないんだ。てっきり一人か二人くらい良い人がいるかと思っていたけれど、私の思い込みだったのね。」

僕は詩音の言葉を受けて絢香だけでなくアイドル占術師恭子や4歳年上の上司である佳子(よしこ)先生との恋愛模様を思い出し、少しの間、沈黙した。

メインの肉料理がテーブルに運ばれる。詩音が食べたかった牛肉のフィレスステーキ肉だ。詩音は肉料理をナイフで切りながら「ステーキ88でも良かったのにな」とつぶやいた。

「まあ、ステーキ88だったらいつでも行けるから、今度は沖縄の美味しいお蕎麦屋さんにも行こう」

「いいねえ。わたし、牛丼屋さんとかとんかつ屋さんとかそういう庶民が良く行くお店に憧れがあるからうれしい。アキラは普段高級なお店には来られないから、大切に食べてよね」

「こんな美味しい肉料理が毎日食べられるならば、詩音ちゃんに忠誠を誓ってもいい」

最上級黒毛和牛シャトーブリアンの柔らかな肉にナイフをいれる。スジがないような高級な肉を食べるのは友人の結婚式の披露宴以来だった。口の中に入れると溶けてしまいそうなほど肉のうま味と特製のソースが絡み合い、思わず天井を見上げた。詩音は幸せそうな顔して微笑んでいる。5つ星ホテルに宿泊できるだけでも幸運だと感じているのに、13歳も年が離れている詩音とは婚約者という設定も忘れて新婚旅行に来ている夫婦のようにも感じられた。

「アキラって誕生日が8月27日だったのでしょ？」

「そうだよ。よく知っているね」

「数字に変換すると827だね。この827って素数だって知ってた？」

詩音は不思議なお話をし始めた。素数とは1かその数字でしか割り切れない数字をいう。

「少し前に827が素数ってことには気づいていた。宮沢賢治も827だからご縁に感じていて、その謎を確かめるために母親の故郷である沖縄で自分探しをしていたんだ」

「827は144番目の素数だよ。144はアキラの住んでいる大田区の郵便番号と同じじゃない？」

詩音から衝撃的な事実を教えて貰った。確かに、144は僕の住んでいる東京都大田区蒲田の郵便番号だ。しかも実家の近くには郵便局が2店舗もある。なぜこの事実気づかなかったのかと言えば、僕が根っからの文系人間だったからだろう。

「144は大田区の郵便番号だ。これで、謎はすべて解けたような気がする。例えば、広告などで使われるコピーライティングでは一人から一人に向けて書くのが基本なので、手紙を書くような気持ちで書くことが重要とされている。一人にヒットすればその先にいる数百万人の人たちの心を動かすことだってできる。僕の名前は文章の章からアキラと命名された。」

「アキラは小説家になる運命からは逃げられないみたいだね」

「もうあと戻りはできない。親孝行だってしたいし、人気作家になって社会的報酬を得たい気持ちは募っていく一方で、もはやそれだけが僕の生きる糧になりつつある」

「でも、よく調べたでしょ？ アキラのこと」

「まさか、そこまで僕のことに興味を持っていてくれていたなんて正直に言って嬉しいよ」

話が盛り上がってきたところで水を差すかのように、女性店員がラストオーダーです、と告げに来た。コース料理はパスタが出て終わりらしく、詩音の誕生日祝いのケーキとホットコーヒーをオーダーした。ダイエット中なので甘いものは控えているつもりだったが、せっかくの誕生日なのだし、詩音との会話は知的好奇心が満たされて楽しい。しかしながら、今夜は付き合ってもいないおまごどみたいな婚約者という設定だけでホテルに泊まることになった男女が、チョコレートのように甘い雰囲気になんて耐えきれんのだろうか、と頭を悩ませていた。意外と雰囲気に流されやすい僕のことだから、詩音のほうから誘ってこられたら、情欲をむき出しにして、身体の関係をもってしまうかもしれない。まだ詩音は若いと言っても、23歳なのだし、さすがに初めてってわけではないだろうと、この時はそう思っていた。

ディナーを終えて17階のエグゼグティブスイートのツインルームまで戻ってくる。

木目調の家具や沖縄の焼き物であるやちむんが昭和の古き良き時代をイメージさせてくれて、沖縄の名工が手掛けた琉球グラスにアイスコーヒーを入れてソファに腰かけていた詩音に手渡す。詩音の飾り気のないリラックスした姿を見て、僕はアコースティックギターでも弾きたい衝動にかられた。詩音が先にお風呂に入るので、つまらなくスマートフォンを見ていた。

大好きな映画の影響で、G線上のアリアを聴きながら電子書籍を読むことが習慣になっている。バッハによって作曲された「管弦楽組曲第3番」と呼ばれる組曲を、後世のヴァイオリニスト、アウグスト・ヴェルヘルミが独奏ヴァイオリンとピアノのために編曲したものが、『G線上のアリア』と呼んでいる楽曲で、G線だけで演奏できることでも知られている。

若き日に僕が書いた詩にはG線上のアリアに纏わるエピソードとキリスト教への強い憧れが示されていた。僕は記憶の彼方に消えつつある短編詩を紙に書きだした。

橙色したお月様が夜闇の中で凍えているようにみえた。

G線上のアリアのせいだ。

母親のお腹の中にいた微かな記憶が蘇ってくる。

赤ちゃんの頃のような純粋な気持ちで人の幸福を願うことは、僕にはもうできない。

air on the G string.

ピアノ弾きは技を磨き続けた。

彼女は言った。

「太陽はあまり好きではない」と。

冷たい雨に射られることも。凍えるような雪が降ろうとも。

ひとり寒風に晒されて・・・

悲劇のヒロインを演じているのだろうか。

天空を駆ける使徒たちの物語が幾千にも綴られては消されていく定め。

聖なる母マリア様へ。

僕はこの心の叫びとも言える詩を糧にして、幾つもの眠れない夜を超えて生きてきた。

詩音はアーティスト志望だというのが、ライブハウスで音楽活動をするならば、沖縄は天地かもしれない。沖縄には働きながらも音楽がやりたいという人がたくさんいて、中には音楽活動だけで生活しているプロもいるけれど、内地では知られることはない。彼らは東京に来なくても、沖縄県内だけで十分なほど生活できる経済的基盤があるのだから、わざわざ、外国よりも遠い街で音楽活動をするよりかは、沖縄にいたほうがさぞ幸せなことだろう。

バスルームのほうから、ドライヤーの音がする。まだ洗い立ての髪を乾かしているのだろう。そういえば、着替えなど持ってきていない僕たちにとって、ホテルのアメニティだけが唯一のルームウェアだ。詩音のはだけたパジャマ姿を見て興奮するほど子供じやない。

詩音は髪の毛を乾かしてバスルームから出てきた。黒い肌が柔らかなコットン製のバス

ローブに包まれて、詩音のGカップもある胸の膨らみがセクシーでとても23歳にはみえないほど大人びて見えた。

「綺麗だよ。詩音ちゃん」目を細めながら僕は言う。

「なに。急に改まって。興奮しちゃった？」詩音は上目使いでそう言うと、冷蔵庫からコーラを取り出して飲んだ。

「興奮ってか、素直にそう思っただけだよ」少年のような言い訳をすると、詩音はアキラもシャワー浴びてきなよ気持ちいいよと言って、ソファに座っていた僕の隣に来て、クッキーを食べ始めた。詩音の全身からアロマの良い香りがする。このまま、抱きしめたい衝動にかられた僕は、13歳も年下の詩音のこと、はじめて女として意識してしまったのかもしれない。もっとも、出会ってからまだ一日も経過していないのだから、こんなハーレム状態が長く続くわけがないと言い聞かせながら、スマホを片手に「喫煙ルームに行ってくる」と詩音に告げて、部屋を出た。羽田空港で詩音に買って貰った緑色のTシャツの上に、エメラルドグリーン色のカーディガンを羽織る。東京では、すっかり秋めいた空模様だったというのに、那覇はまだまだ夏真っ盛りといった様子で、海風が吹くと少しだけ肌寒く感じるが、昼夜を問わずカーディガンさえあれば快適に過ごせそうだ。灰皿が置かれた喫煙所にたどり着くと、ポケットからメビウスロングの6ミリとターボライターを取り出して、タバコに火をつけた。昭和の時代には、部屋で喫煙することが可能だったことを思えば、喫煙者にとってだいぶ世間の風当たりが強い時代になったものだ。

僕は自分以外誰もいない狭い喫煙所において、古き良き時代に思いを馳せる。少年時代、父親から頼まれる買い物といえば、他の店ではみかけないショートピースを頼まれて、タバコ屋へと出向き、50円ほどのおつりでアイスクャンディーを買って帰る。買ってきたタバコを父親に渡すと、満面の笑みでありがとうと言われ、子供心に、今日は良い行いをしたのだと感ずるのであった。まだタバコが200円台で買えた時代には、僕たちは、ファミリーコンピュータに夢中になって、親の目を盗んでは、暗がりの中でゲームを楽しんでいた。そのせいで視力が悪くなり、高校生くらいになると、眼鏡をかけなければならないほどに何も見えない世界で生きてきたのだが、僕たちが高校生くらいの時は、まだコンタクトレンズが普及し始めたばかりだったので高価で買えず、しばらくの間は我慢してコンタクトレンズが買えるようになった20歳を過ぎた頃には、目に映る世界が全て新鮮に感じたのであった。

今、詩音と5つ星ホテルに泊まることになってしまった僕の心境といえば、はじめて異性とお付き合いした時に感じた、淡くて脆くて、口の中にいれたらすぐにでも溶けてしまいそうな飴玉を、舌でコロコロと舐めまわすような小さな恋の物語。ツインのベッドの脇、詩音の寝顔を見ながら、まるで最愛の子供の頭を撫でるかのよう、愛おしさがこみあげてきて、あのいつか観た美しいアニメーションの世界のように、運命についてまだ何も知らされていない二人の間にある赤い糸を辿った先にある希望という名の未来を、夢かなうその時に、今のようにして君は僕の隣にいてくれるのかな、と想像力を働かせている。

タバコを吸いきると僕は一階のロビーまで降りて、スマートフォンを手にした。そのままメモを取り出して4歳年上の上司である佳子先生に報告の文章を作っていく。高級ホ

テルのラウンジには、テーブルにノートパソコンをひろげて作業している若い女性客が数人いる。フォーマルなレディースの黒いスーツの下、白い襟付きのシャツがなんと大人な色気を感じさせてくれる。この人たちは、僕とは違い、学業優秀のまま大学へ進学して、就活戦争を勝ち抜き、クリエイティブな仕事に就いた優秀な人材であること。高校時代ですらまともに勉強してこなかった僕にとって、彼女たちは永遠の憧れの存在だ。一緒に空間を共にしているだけで幸せを感じる。彼女たちを眺めていると、職場恋愛で結婚していく人が多いこともなんとなく理解できる気がする。働く姿というのは、魂を輝かせていくことに繋がっている。人生において、最高の時に最高の伴侶と出会うのは宇宙の法則の一つである、と上司の佳子先生に教わった。だから、職場の同僚の絢香とアイドル占術師の恭子から好意を寄せられていると知った時に、すぐにでも彼女たちから離れなければならないと思った。しかしながら、沖縄滞在から東京に帰ってきて、たった2週間ほどで再び沖縄へと戻って来なければならないようになったこと、少しだけ懺悔の気持ちで頭を過っている。

佳子先生には、簡単に那覇近くのホテルに滞在していることだけを報告した。LINEがすぐに既読にならないことを思うとたぶんクライアントさんとセッションしている最中かもしれない。僕はエレベーターで17階まで戻る。部屋のドアを開けると、アロマの薫りが部屋中に漂っていて、詩音がつまらなくスマホを見ていた。

「おかえり。長かったね」詩音は置いてきぼりを食らった子犬のように僕の元に駆け寄って言う。「部屋ではタバコ吸えないからね。もう禁煙したいと思って20年も経つけれども、一向に辞められる気がしない。たぶん、みんなが言うように仕事をしているうちは無理だろうな」駆け寄ってきた詩音の頭を軽く撫でる。すると、詩音が唇を突き出して「して」というので、詩音のくるとカールした前髪をかき分けておでこにキスをした。「ちょっと。おでこだけなの？」と詩音が期待外れの表情を浮かべるので、僕は投げキスをする仕草をしてごまかした。

「お姫様をお守りする騎士というのは、最初はこんなもんさ。幾つもの謎や事件を解決していく中で、危険な目にあいながら、お互いの気持ちが高ぶって自然と結ばれていく。詩音ちゃんとはそんな簡単に結ばれちゃったら面白くないからね。だって運命の人でしょ？」

「つまらないな。そういうハリウッド映画みたいなシナリオ。セックスから始める恋があったっていいじゃない。それとも、アキラビビっているの？」

「セックスなんていつだってできる。あんなのただのスポーツの一種みたいなものだからさ。そんなことよりも、運命を信じていることから始まる恋愛の行きつく先を見たい」

僕はホットコーヒーを淹れる。詩音にはミルクティーがいいと思い、パックのお茶をカップにセットしてケトルでお湯を沸かす。

「アキラはわたしとの運命を信じているの？」詩音は僕のカーディガンの裾を引っ張りながら尋ねる。「運命か。占い上では確かに相性が良いと出ているからね」

「運命のひとつだよ。マヤ暦では私がアキラのガイドK I Nだし、宿曜占術でも最高の相性とでているし、四柱推命でも干合とって特別な関係性にだけ相性だから。運命の人とこんなに早く出会えるなんて思ってもみなかった」

「命を運ぶと書いて運命。確かに、こんなにも小説家になる夢を応援してくれているのは詩音ちゃんだけかもしれない。友達は形式上では応援してくれているみたいだけど、ストーリーを書いたとしてもまともに読んでくれやしない」

「私はアキラの内面をよく知っているつもりだよ。自叙伝を読んだからね。思春期に家に引きこもるくらいに繊細で、かつ大胆不敵で、何か大きなことを成し遂げるような雰囲気漂っている。けれどもね、アキラの内面世界だけを見て運命に感じていたけれど、こうして一緒に空間を共にしていると、遠目からアキラを覗いているだけで眠くなる」

「眠くなる。それって話しがつまらないってことじゃん」僕は飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。

「眠くなるくらいの癒しを感じるってことだよ。ドキドキするだけが恋愛じゃない。むしろそんなの脳の錯覚だよ。やっぱり長い人生を共に歩んでいくには、沈黙が苦痛にならない方がいいもの」詩音は両手を合わせながらしみじみと語る。僕はコーヒーカップをテーブルに置いて詩音の手を引き寄せる。

「僕は夜が一番好きなんだ。こうして一日の終わりに大好きな人と語り合う。たったそれだけのために生まれてきたきがするなあ」詩音は僕の手を握り返して「アキラ、大好きだよ」と囁くように言った。その言葉は愛しているの言葉よりも重みがあるように思えて、僕は詩音の隣に腰を掛けた。柔らかなソファの感触がお尻のあたりに感じられる。その暖かなぬくもりに忘れかけていた恋愛感情が噴出してきて、アロマの薫りがする彼女の髪の毛を撫でる。スマホからヒーリングミュージックをかけると詩音はまるで眠り姫のように可愛い寝息をたてはじめて、少しソファで横にさせてあげることにした。ベッドから毛布をもってきて詩音の小さく見える身体にかけてあげる。ここが自分たちの新居だったら良いのと思う。昨日出会ったばかりとは思えない二人の急接近に、神様はどんな顔して見守っていてくれているだろう。眠れない夜。心療内科で処方してもらった睡眠薬は飲む気がしない。むしろ、このままずっと詩音のそばにいて、朝まで寝顔を眺めていたい。

幾つもの試練を乗り越えた先に、今のように、二人仲良くこうして笑顔で隣同士にしていることができるのだろうか。僕たちは夢の中で出逢えることを祈り眠りについた。

詩音の誕生日から一夜明けた9月14日。昨晚、なかなか起きない詩音をベッドまで運んだせいで、アラームをかけることを忘れて眠りについたため、もうすっかり朝食には遅すぎる目覚めだった。ブランチはルームサービスを頼むことにした。佳子先生からの連絡はまだない。今日の予定はすべて白紙のままだから昼食は沖縄そばを食べようということになった。朝食は軽めにBLTサンドとスープでも頼んでおけば、またお腹がすいた時にでも食べれる。詩音はオレンジジュースを飲むというので僕も同じものを頼み、予定の時刻よりも早くにルームサービスは部屋に届いた。珍しく女性のウェイターが料理を部屋まで運んでくれたのだ。以前、僕が働いていたホテルでは部屋では何が起きるかわからないからという理由でルームサービスは男性従業員が運ぶ役目なのだと思います。さすがにエグゼクティブスイートとなると、ホテルの従業員も金持ちだと解っているので安心するみたいだ。

詩音は昨日買ったユニクロのTシャツにディーゼルのジーパンというラフな姿に着替えていて、耳につけていたピアスや指輪はテーブルの上にひいたティッシュペーパーの上に丁寧に並べて置いた。何も持たずに羽田から那覇に来るとするのはさすがに初めての経験で、なければ買えばいいという詩音の金持ち思想が僕にとっては心強く思う。半面、ひも男に成り下がった自分自身のこと、占い上では玉の輿にのる運命というのが出ていて、これは幸運なことなのだ、と自分自身に強く言い聞かせた。

「アキラ。コーヒー飲むでしょ？」詩音はコンビニで買ってきたインスタントコーヒーを淹れてテーブルまで運んでくれた。ありがとう、とってコーヒーを受け取るとなんだか新婚旅行で沖縄へきたカップルのやりとりのようで、少し想像しただけで恥ずかしくなった。

BLTサンドを食べながら、スマホでLINEをチェックする。そして、メールボックスを開き、無料メール鑑定の応募数を確認する。月曜日だというのに、30件近くのメール鑑定依頼が来ていて、詩音との朝食が終わったら、パソコンを開いて作業しなければならない。

詩音はお仕事で沖縄に来ているという意識は低い。それよりも、離島の綺麗な海辺で夕暮れのサンセットを見たりスキューバダイビングをしたりといった遊びの話に夢中になっている。僕はインターネット店勤務なので、全国どこにいてもお仕事はできるが、さすがに上司の許しがなければ詩音と沖縄旅行を楽しむなどできやしない。幸いなことに大財閥のご令嬢である詩音のお世話を最優先にするように上司から言われているので、平日の月曜日の遅すぎる目覚めに関しても、いちいち文句を言われることはない。沖縄本土では星が見られることはだいぶ少なくなった。幼き頃、家族旅行で母親の実家に遊びに行ったときには、満天の星空の下で、花火をしたり大きな庭でバーベキューをしたりした楽しい思い出がある。今となっては、離島に行くことくらいしか星空を眺めるチャンスがなくなってしまったこと少しだけ寂しく感じている。詩音は2回目の沖縄旅行だというが、はじめて沖縄に来た時には、名護にあるラグジュアリーホテルに滞在してほとんど外出しないまま東京へと帰ったと言った。沖縄本島でも少し車を走らせれば、ハワイを感じられるお気に入りの場所がすぐみつかるはずだからと言って、僕は時間さえあればレンタカーを借りて詩音に沖縄の魅力をたっぷりお伝えしようと考えていた。

朝食を終えた僕たちは、パソコンを開いて無料メール鑑定に取り掛かることにした。詩音はうちのお店で働く意思があるのかなのか、ミラクルスポットの国際通り店は、この2週間ほどの間に一店舗だけになってしまったから、発送作業やインターネットがメインの本店勤務になってしまえば、詩音だって無料メール鑑定のメインに活動することになるはずだ。僕は詩音に無料メール鑑定のやり方を教えることにした。

「詩音ちゃん。無料メール鑑定はあまり説明しすぎないことがポイントなんだ。もっと知りたいと思わせることで有料の鑑定に誘導する」

「天運鑑定やプレミア鑑定でしょ？」詩音は当たり前という顔をしている。「無料と有料の線引きをしなければ、大変なことになる。無料で鑑定しているのにクレームを入れてくる人はお客様ではない。無料だからって相手の都合の良いような鑑定はしない。できるだけ、クライアントさんの中にある悩みに耳を傾けているうちに自然と好意を寄せられてストーン販売に結び付く」

「なんだかタレント業みたいだね。人気がでなければ収入にはならない。私、お客さんに媚び売るのは苦手だな。うまくいかない恋愛だったら、はっきりと遊ばれているだけですって教えてあげたい」詩音はパーソナル匠(たくみ)を持つ。このパーソナルというのはお仕事の仕方や性格がはっきりと解ってしまう。匠というパーソナルはスペシャリストタイプで物事をはっきりさせたがる傾向がある。パーソナルは本人が自覚している性格のために、鑑定の中で一番当たると評判の鑑定項目なのだ。詩音のマジカルカラー藍を数値化すると7になり、さらにパーソナルやマジカルナンバーを加えると『777』という縁起の良い数字が導きだされる。しかしながらマジカルカラー藍を持つ人はなぜか占い好きな人が多いという特徴を持つ。そして、美容や健康にも興味関心があるために美容部員やネイリストに多く見られる星まわりなのだ。

「例えば、お客さんにとってはどんな心境で占いに来られるのかをイメージして欲しい。自分でも散々自問自答した挙句、友人に相談しても心がすっきりしない。自己肯定感が下がった状態で占いに来られるお客さんが多い世界だ。友達からははっきりとうまくいきそうにないと言われて、それでも諦めきれずに最後の望みをかけて占い師のもとに来る。だから、頭ごなしに説教したりうまくいかないと言うのは良い占術師とは言えない。あくまでもお客さんも頭では解っていて、お話を聞いて欲しいだけの人もいるんだ。その心を少しでも前向きになれるようにサポートしていくのが占術師のお仕事だよ」詩音は眉間にしわを寄せて少し難しいといった顔を浮かべて聞いている。

「じゃあ、アキラだったらうまくいきそうにない恋愛だって応援するの？」

「うまくいきそうにない恋愛だって最初から決めつけはしない。少しでもチャンスあるならば、最大限に応援するのが占術師の役割だよ。だって、うまくいきそうにない恋愛だったら、はじめから友人たちから反対されているはずだから、最後の最後に頼ってきた占術師からも同じこと言われたら生きる糧がなくなってしまうじゃない。」

「それはそうだと思うけど」

「大切なのはさ、何か意味があって僕や詩音ちゃんの前に現れているってことなんだ」

「それって宇宙の法則の一つなの？」詩音はものわりの良い子だ。短期間で占術師としての考え方や心構えをマスターしつつある。

「そう。宇宙の法則では合わせ鏡だと教えている。例えば、お客さんが悩んでいることは自分自身が解決したい悩みだったりするし、何かしら教えてくれているものだよ」

「じゃあ無料メール鑑定はたくさんの人にマジカルカラーを教えられるチャンスだね」

「ああ、僕もそう思う」詩音にパソコン画面を見るように言う。僕のパソコンには必要最低限の機能しかついていない。無料メール鑑定用のLINEアプリ、資料作成のワード、メール受信用のGメールフォルダ、PDF形式の鑑定書を保存するファイル、それらの全ては、今の仕事をするためだけに購入したパソコンなので、動画編集などのお仕事 cameたら自宅のデスクトップパソコンを使うしかないのだが、必要最低限の機能しかないために持ち運びに便利なのでこのパソコンを選んだ。また違う仕事を頼まれるようになったら新しいパソコンを買えばいい。だが、僕は文章のスペシャリストとしての自覚と誇りがある。もしも、文章を書くお仕事がなくなったら、それが占い師から小説家へとシフトチェンジするその時なのだ。詩音には鑑定書を何枚も見せてケースバイケースで対応するようにみっちり教え込んだ。例えば、マジカルカラー藍だから、占いに興

味があるだけでなく自分も占い師として活動することに向いていることや、なぜ占いに興味があるのかと言えば自分自身のことが一番良くわかってないから知りたいという欲求が強いからなのだ、と。だから、マジカルカラー藍とでたら、占い師になることもおすすめするようにとアドバイスをした。

「じゃあマジカルカラー緑のアキラはどうなのよ？」

「僕の場合は深層心理とパーソナルも合わせてみていかなければならない。例えば、マジカルカラー緑は、癒し、大自然、樹木といったキーワードが出てくるのでぼっと見は癒し系に見える。だから単純に、セラピストもやっているし、作家業もやっている。セラピストは一人対一人だけど、それだけじゃつまらない。もっと作家業みたいに一人で他人数を相手に商売することに長けていることが解る。これはあくまでも。僕が深層心理に樹を持つからなんだ。深層心理というのは、無意識の行動を意味しているので、その人が一番求めていることがわかるのだけど、無意識だから自分自身でも気が付かないことが多いからセッションではパーソナルと深層心理をメインにひも解いていきます」

「パーソナルのことはよくわからないけれど、私がメール鑑定するならば数打てば当たる方式かなあ」詩音は本当に頭の良い子だ。僕なんてその境地に至るまで散々葛藤があったというのに話せばすぐに理解してくれる。有名私大付属の幼稚園時代から英才教育を受けた人というのは、お友達にも成功者がたくさんいるはずなので、必然的に賢くなるだろう。

僕のように偏差値教育に疑問を持ちつつ、それを言い訳に独学で勉学に励んできたタイプというのはついつい物事を斜めから見てしまう悪い癖がある。詩音には疑うとかそう言った類の猜疑心は全くもってしてない様子だ。こちらから教えたことは素直に受け取って、あとは自分の経験則に従って自分の頭で正解を出していく。世間では自頭がいいといわれるタイプに共通して言えることは、自分の頭で考えを明確にしていける人のことを指すのだ。

一通り詩音にメール鑑定の極意を教えると、頭を使ったからお腹がすいたねと言って、僕たちは国際通りを散策することにした。詩音は紺色のジャケットは暑いというので、ヒステリックグラマーのTシャツをクリーニングに出して、ユニクロのTシャツ一枚でかけるという。洗面所で化粧を直したりピアスをつけている間、僕はすべてのメール鑑定のチェックを終えて、あとはスマホに通知が来るように設定をした。

ハイアットリジェンシーのグレイ色したタイル張りの床を革の靴で歩く。沖縄滞在中には、着替えや靴などこまごまと買い物しなければならない。行動力が高い詩音のことだから、今日はさっそく那覇にあるデパートリウボウへ出向いて買い物をすると言い出すだろう。

ホテルの玄関口をでると、今日はからっと空気が乾燥した晴天で、じりじりと照り付ける太陽の日差しにサングラスが欲しくなってしまう。少し歩くと昨日は気づかなかった公園が見える。がじゅまるの樹や石畳の階段の奥には南国特有のピンク色した花が咲き乱れている。夏の日差しに包まれて、シャボン玉を飛ばして遊んでいた幼き日の記憶が蘇る。

幼稚園の頃は、お砂場で女の子とおままごとをしながら雑談をするのが日常風景だった。大人と呼ばれる年齢になった35歳になっても、いまだに大切に胸の中にしまっている

僕だけの夏物語。この南国沖縄特産のマンゴーのようにとろける様に甘い。

隣では詩音が琉球ガラスのお店や魔よけの置物であるシーサーを見つけて大はしゃぎしている。彼女にとっては2回目の沖縄旅行とあって、目に映るものすべてが新鮮に映っていることだろう。「ねえアキラアイス食べない？」ブルーシールという沖縄県では有名なアイスクリーム屋さん前で詩音が言う。「紅イモが美味しいよ。僕も食べようかな」カラフルなアイスクリームで彩られたショウケースを見ながら詩音は「チョコミントがいいかな。それとも塩ちんすーこー。この青い海みたいなアイスはなに？」鮮やかなエメラルドグリーンとホワイトバニラをミックスさせたアイスクリームは沖縄の透き通る海を連想させた。

「こんにちは。ブルーウエーブとって、うちでは人気トップ3に入るアイスですよ」帽子をかぶった堀の深い女性店員が明るく陽気に答えると詩音はブルーウエーブを注文した。僕は塩ちんすーこーが気になっていたのだが、インスタ映えしそうな紅イモを注文して電子マネーで決済した。カップに盛られたアイスを手渡されると、近くに置いてあるベンチに腰かけて、まずは写真をとることに。詩音のインスタはフォロワー一万人もいる人気インフルエンサーで、僕のインスタといえばフォロワーが50人しかいない過疎化している状態で、同じ写真をアップロードしても温度差を感じる。詩音はインスタの目的はライブ活動のためと割り切っており、僕も結解プレスの写真さえ載せていれば勝手にグッドボタンがついていくので、プライベートな写真はあまりのせていない。

「ねえアキラ、紅イモ一口ちょうだい」詩音のスプーンが僕の紅イモアイスに伸びる。紫色した紅芋はサツマイモと同様に焼いたり、天ぷらにしたり、お菓子にしたり、色々な調理方法で食べることができる。生の紅芋を沖縄県から持ち出すことは禁じられている。そのため、紅イモタルトなどは沖縄土産として大変に人気があるのだ。詩音は紅イモアイスを口にして「美味しい」と言った。

ベンチに腰を掛けていると様々な人種が行きかってくる。中国人観光客やアメリカ人、東南アジア系の人々、沖縄タイムを満喫する地元民など、見ただけで飽きない。昼飯前にアイスを食べた大丈夫なのだろうか若干の不安が過る。詩音はホテル滞在中からクッキーをつまんだりコーラを飲んだりしている。さすがに若い胃袋は元気だ。僕は詩音の荷物持ちみたいなものだから、詩音の胃袋事情に合わせなければならない。詩音はブルーウエーブのアイスクリームをペロリと平らげると今度は沖縄菓子のサーターアンダギーが食べたいと言い出した。お昼に沖縄そばを食べようと約束しているので、さすがに昼飯あとにしようといって詩音をなだめる。詩音はつまらなそうな顔して、国際通りを歩いていると、会社のトップである家元が経営する沖縄そば屋を発見したので、ここで昼食を食べることにした。

狭い店内の奥には水のセルフサービスがあり、僕は給水機で二人分の水をグラスに注ぐ。

この店は沖縄そばの麺にラーメンなどに使われるかん水を使っているため、硬めの麺にとんこつとだし汁をミックスさせたスープが特徴的で、どちらかという三枚肉が乗っている以外には、ラーメンを食べているような感覚が残る。以前、家元佳子先生、アイドル占術師の恭子と来店した際には、テーブル席でとても丁寧な接客をして貰った記憶がある。昼も過ぎると、お客さんもまばらで、カウンター席に数人お客さんがいるだけの店内には、従業員同士の会話が丸聞こえで、ご令嬢の詩音を連れてくるようなお店

ではないと思っていたのだが、案外詩音は気に入った様子でメニュー表を見ながらわくわくしている。

僕たちは三枚肉が乗ったスタンダードな沖縄そばを注文する。

「詩音ちゃんは普段こういうお店一人では来れないでしょ？」

「そうなんだよ。幼いころから、屋台とか行ってみたかったんだけど、大学に入るまでは典型的な箱入り娘でさ。信じられないかもしれないけど、門限があったんだよ。だから、友達と遊びに行くにもわざわざ母親に誰と行くのかどこに行くのかを事細かに聞かれるわけ。まさかラーメン屋さんなんて行くつもりじゃないでしょうね、って感じでいちいち詮索してくるのよ。幼いころから外食と言えば、高級なお店しか入ることを許されなかったから、その反動もあって、大学時代には母親に内緒で友達とラーメン屋さん巡りとかもしたんだ。でも、いまだに一人では入れないな。なんか女子が一人でラーメン屋さんにいると変な人たちがじろじろと見てくるから怖くてね」詩音は水を飲みながらそう言った。

「それって詩音ちゃんがSNSで有名人だからじゃない？僕は男だからじろじろ見られるっていう気持ちが解らないけれど、確かにラーメン屋に一人で入れない女子の話聞くと彼氏がいないって言っているみたいで負けた気がするらしいね。でも、ここは家元がオーナーの沖縄そば屋だから安心して入れるし、とんこつラーメンみたいで美味しいよ」

エプロンをかけている女性店員が沖縄そばを運んできた。スープは透き通っていて、とんこつとだし汁の独特の薫りがする。三枚肉とかまぼこが載せてあり、紅ショウガがアクセントになっている。いただきます、といってまずはスープを蓮華ですくう。とんこつラーメンを食べているかのような優しい味がする。面は硬めで歯ごたえがしっかりと残る九州出身の家元らしいコスパの良い沖縄そばを食べて詩音も大満足といった表情をしている。

沖縄そば屋を出ると、僕が勤務する占いとパワーストーンのお店ミラクルスポットの本店が近かったので、詩音に見学してみるかを尋ねた。行きたいのは山々だけど、こんなラフな格好を見られたくないというので、デパートリウボウへ行き洋服を買うことに決まった。

国際通りの入り口近くにあるデパートリウボウは、僕も沖縄滞在中にはよくお世話になっているデパートだ。ちょうど国際通りの出口である牧志から県庁前まで行くには、ゆいレールに乗る手段もある。詩音は食べすぎたから少し歩きたいというので、おおよそ1.6キロに及ぶ国際通りを歩くことにした。

「アキラは沖縄土産はどんなの買って帰っているの？」

「定番のものしか買わないよ。紅芋タルトとかさんびん茶とか自分で食べる用の沖縄そばとかね。あとは、パワーストーンが安いから友達に買って帰るくらいかな」

「へーパワーストーンかぁ。どれ、どのくらい安いのか次のお店でチェックしてみよう」

詩音はあまりパワーストーンには興味がないと思っていた。民芸店の隣にあるパワーストーン屋には、若いカップルが店先に並べられた色とりどりの天然石を眺めながら、どれにしようかと迷っている。店先で接客をしている男性は沖縄訛りの言葉で対応にあたっている。

詩音はカップルと隣合わせるように、横目で店先に並べられたパワーストーンを眺めて、「わぁ可愛い」とつぶやきうっとりして店の奥へと足を踏み入れた。僕も詩音に続いて、店頭のパワーストーンを物色する。なるほど、確かにこのショップは値段こそピンキリだが、平日の昼間からこうして観光客が列をなすのが解る気がする。例えば、ピンクタイガーアイ。

このタイガーアイというストーンは金運やギャンブル運をつかさどる人気のある石で、イエローが一番流通しているのだが、実はタイガーアイは人工的に着色しているストーンのため、ピンクやブルー、パープルなど色のヴァリエーションも豊富に取り揃えているのだ。

このピンクタイガーアイは近年市場に出てきた割と新しいパワーストーンで、東京でも見かけるようにはなってきたのだが、ここまでの大粒でクオリティが高いピンクタイガーアイは沖縄でしか売られることはない。しかも他のストーンに比べて安価だ。パワーストーンは一般的に、大粒になればなるほど価格が上がる。しかし大粒になると大抵クオリティが下がるという問題もあり、一概には大粒だからといって品質の良いストーンとは限らない。

詩音がお店の奥で物色しているのは、ゴールドルチルだった。このゴールドルチルは、東洋一金儲けがうまい華僑が質の良いゴールドルチルを求めて旅をし、始祖亡きあとは代々家宝として継承されるという伝説がある。ゆえに、ゴールドルチルは金運アップの最高峰のストーンとして、金持ちの間では人気がある石なのだ。

「ねえアキラこのゴールドルチル可愛くない？」詩音は瞳をキラキラさせて言う。

「金針の入り方がとても美しいストーンだね。東京だったら、数十万するよ」

「わぁこの緑色の石ははじめて見た。翡翠ではないみたいだね。」

「これはクリソコラと言って、ヒーリングストーンの一種だよ」

アースカラーのクリソコラは、東京では滅多に見かけることはない。珍しいストーンだ。

「ねえ、ミラクルスポットはここのお店よりももっとクオリティが高いストーンあるの？」

「一応、ハイブランドしか取り扱っていないから、詩音ちゃんにはぴったりかもしれない。けれども、パワーストーンってのは相性っていうかさ、一目みてこれだって運命感じるストーンが一番良いと思うよ。僕の場合は出不精だから、沖縄のパワーストーン屋さんを巡るよりも、インターネットでも安心して購入できるミラクルスポットでしか買わないだけさ」

「また、夜にでもパワーストーン屋さんに来よう。私は夜型だから、インスピレーションが湧いて理想的なストーンに出会えるかもしれない」詩音はそう言うとテンション高くして店を出た。

「ねえ、デパートリウボウってレディースの服なんか売っているの？」

「確かあったはずだよ。まぁもっともヒステリックグラマーやディーゼルがあるかは解らないけれど、ヒスが欲しいならば、那覇新都心まで行けばあると思う」

「とりあえず、なんでもいいよ。ユニクロのTシャツが悪くてわけじゃないけれど、重ね着するのに適当なカーディガンが欲しいだけだからさ。アキラのお洋服も買ってあげるからね」詩音はヒモ男が好きなのだろうか。それとも僕をヒモ男に仕立て上げたいの

か、たぶん詩音が悪びれもなく言うセリフの一つ一つに男としてのプライドが引き裂かれる思いがする。詩音と一緒にいると一般的な金持ちという概念をことごとく覆される思いがする。

たぶん、僕の給与明細を見たら、詩音のタワマンの家賃分くらいしか振り込まれてなくて驚くかもしれない。占術師というのは、所詮は人気商売だ。本来ならば、僕のようにセラピストや作家を兼務しながらできるほど甘い仕事ではない。クライアントさんも人生がかかっているのだから、ちゃんと真剣に相談に乗らなければならない。しかしながら、この占術は巷に溢れているような決まりきった運命論ではなく、運命は自分で切り開いていくものという前提のもと、気軽にポップに楽しめるよう幾つもの工夫がなされている。身に着けるだけで運気があがるマジカルカラーは琉球占術の象徴だ。デパートリウボウではどんな洋服をチョイスするのだろうか。マジカルカラー藍色の詩音はとてもお洒落にこだわりがありロマンティストなのだ。

那覇の国際通りをひたすらまっすぐ歩くと、那覇市役所が見えてくる。その反対側がデパートリウボウの入り口だ。白い外観にガラス張りのエレベーター。僕たちは一階の案内所でレディース服売り場のフロアマップを手にする。詩音が大好きなロックミュージックとファッションをテーマにしたヒステリックグラマーはないようだが、シックなデザインのコムサイズムやポールスミスといった定番ブランドはあるようだ。エスカレーターで4階まで登ると、小さな店舗が幾つも並んでいて、それが逆に詩音のファッション魂に火をつけたようだった。

「ねえアキラ、私は服選ぶときは店員さんと長話ししちゃうタイプだから、別行動にしよう。これ私のカードだから好きなもの買っていいよ」詩音は昨晚見たブラックカードではなくマスターカードを僕に手渡した。暗証番号求められたらLINEしてというので、カードを受け取り、しぶしぶ5階のメンズファッション売り場へと向かう。ラルフローレンがあるので、ポロシャツでも買おうかと思い、売り場のおねえさんに声をかける。買い物の時に、いちいちマジカルカラーを気にしなくてはいけないというのは単純につまらない。それでも、占術師なのだし、仕事やプライベートでも着れるファッションと言えば、マジカルカラーの緑とラッキーカラーの赤を選ぶのが無難だ。売り場のおねえさんは沖縄の人特有の癒し系で、丁寧に接客をしてくれる。緑だったらこの時期けっこう売っていますよ、お客様は色にこだわりがあるんですか、と尋ねられたので、占い師をしているので、緑色と赤しか着ないことを素直に言うと、店員のおねえさんは占いに興味を示して、ぜひ占ってほしいと言った。財布から名刺を取り出して店員のおねえさんに手渡す。運気が上がる色と数字を教えてください、何かあったらいつでも連絡してくださいと告げた。

この時期の沖縄はまだまだ夏真っ盛りですね、僕は東京の人間なので、沖縄滞在中はポロシャツでも過ごせそうだけれども、カーディガンもあればぜひお願いします、と自分の好みを伝えると、店員のおねえさんは適当に見繕って持ってきてくれた。まずは緑と赤のポロシャツは買いだろーと思い、これはキープさせて下さいといい、カーキ色した迷彩服のような立体感のあるカーディガンを手に取り、合わせ鏡で自分の全身をチェックする。ラフな格好とはいえ、さすが高級スーツも取り扱うブランドだけあって、スーツに合わせるのもお洒落かもしれない。僕は店員さんのセレクトが大変気に入った。

じゃあこれ頂いていきます、と言ひ、詩音のカードで支払いを済ませて領収書を貰った。商品を畳んでいる間に、思い出したかのように、このカーディガン羽織っていきますので、値札だけきってくださいと言ひ、新品のカーディガンを羽織って鏡を見ながら優越感に浸っていた。詩音との待ち合わせよりもだいぶ早く買い物が終わってしまったために、レディース売り場まで迎えに行こうとしたが、こういう時の女性はサプライズで何を買ったのか秘密にしておきたいのかもしれないと思ひ、詩音には2階にあるカフェテラスで待っているとLINEで伝えた。

木目調の内装がとても可愛い喫茶店に辿りつくと、窓際の席が良いのと後からもう一人来ると店員に告げて、テーブル席に案内された店員が水を運んでくるタイミングでホットコーヒーをオーダーする。こういうデートのような甘い時間を過ごすのは何年振りであろうか。占術師で同僚の絢香とのゲームセンターのデートは身の丈に合ったもので、もともとは食品を買う目的でスーパーに出かけたのだから、まさかぬいぐるみが2つも捕れるとは予想もしていなかった。すっかり恋人気分になってカレーライスをつくり、誕生日祝いをしようと約束していたのにも関わらず、僕は絢香のことを裏切った。婚約者という設定で疑似恋愛を楽しんでいる詩音と絢香が仕事で関わることになってしまったら、一体どんなドタバタが待っているのだろうか。僕は運ばれてきたホットコーヒーにミルクを入れてスプーンでかき混ぜながら、絢香と過ごした楽しい日々を想いを馳せる。はじめて出逢ったときに「占いなんかよりもあなたが好きです」と言ひて絢香の暖かな手を握りしめたこと、ファミレスで手相鑑定を見て貰ひて初めて理解してもらえたと感じたこと、研修の途中で倒れてしまい那覇新都心店の作業部屋で意識が戻り夢や希望を語り合った。会社のトップである家元から僕のお世話係として絢香に白羽の矢が立ち、あの高級リラクゼーションサロンのような部屋で、一つ屋根の下、お互いの愛の深さを確かめ合った。

2週間前のことだというのに、僕には永遠の出来事にも思えた。せめて最後は格好つけて欲しさと佳子先生に頼み、たった数日間の自分探しの旅に終止符を打って東京に帰ってきた。詩音と共に時間を共有しているときは、何が起きるのか全く想像できなくて楽しい。

お金の苦勞から解き放たれた詩音の行動は、野性的でかつ時折、高い知性を感じさせる。アイドル占術師の恭子は育ちの良さを感じさせる女性で、品のある顔立ちをしている。教養の高さを感じさせる言動と洗練された立ち振る舞い、表に出さず控えめな態度で僕にアプローチしてきた。詩音が現れるまでは、恭子が運命の人かもしれないと思ひていた。それなのに、同僚で距離が近い絢香と身体の関係を持ってしまい、自分自身のことの良くわからなくなってしまった。もし仮に、恭子とデートを重ねていたとしたら、絢香の誘惑に打ち勝って結婚を前提としてお付き合いしていたかもしれない。この人生で3度だけ訪れるモテ期の一番大事な時期に、こうして、3人もの恋人候補が現れたこと、嬉しく思う反面、頭痛の種だった。しかも、上司の佳子からもお誘いを受けている。占術師は異性からモテる職業かもしれない。

詩音を待っている間、コーヒーを飲みながら小説のアイデアを考えている。詩音との運命が真実だとするならば、一体どんな素敵なストーリーが出来上がるだろうか。昔からドラマでは、アイドルになるようなタイプよりも、準ヒロインという立ち位置の女性

と結ばれるほうがリアリティがあって好きだった。少年の頃は足が速くてそれなりにモテた。中学生の時はその延長線上で、同じ小学校出身の女の子から好意をよせられて、恋愛よりも男友達を選んだ。高校にもなると、妄想癖が行き過ぎて、気持ち悪いと言われ続けた。そして、社会人になって初めて恋人と呼べる存在ができたのである。ここまでごく普通のだれにでもあるストーリーだ。問題は僕が宗教にはまったことにある。その考え方のせいで、自分自身を精神的に追い込み、自殺未遂まで犯してしまった。3か月の入院と言えば、気の毒と思うかもしれないが、精神科の閉鎖病棟に入院していたと付け加えれば、もう目も当てられないほど不幸のどん底にいたことが理解してもらえるだろう。自分自身でも気が付かないうちに、影を纏う男になっていたのである。異性からは独特の色気があるとよく言われる。その正体は人知れぬ涙や苦難こそが原因かもしれない。こうして詩音を待っている間も一人過去に想いを馳せている僕は、とても暗い人間だ。だから人から愛されるのが不思議で仕方がない。

ウエイトレスがコーヒーのお替りはいかがですか、と尋ねてきたので僕は現実世界へと引き戻される。詩音からなかなかLINEの返事が来ないことを心配している。思えば、昨日出逢ったばかりの詩音のこと、彼女についてのことはまだ何も知らないに等しい。それなのに、占い上での相性で運命を感じて、お付き合いが始まった。昨晚のことお風呂あがりの詩音に、大好きだよ、と言った自分自身の口の軽さに少し嫌気がさす。小説を書いているとついつい歯が浮くようなセリフを軽々と言ってしまふような軽薄な大人になってしまうのだろうか。愛していると重い言葉を何百万回も言われるよりも、たった一度の大好きだよ、というセリフが大人になった今となってはとても懐かしく感じる。大人になるといちいち好きとか嫌いとかそんなこと確認したりしない。成り行きでお付き合いが始まって、デートを重ねて自然と結ばれていく。詩音とは初恋の時に感じたドキドキを思い出す。

腕時計に目をやる。14時半を過ぎているようだ。詩音からの連絡はまだない。ミラク

ルスポットの那覇新都心店はだいたい15時からの開店が多い。マジカルカラー緑の絢香が店長を務める那覇新都心店は、ゆいレールのおもろまち駅から徒歩5分でいける。今、僕たちは県庁前にいるから、4駅で着く計算になる。しかしながら、上司である佳子先生もあのような別れ方をしたことを知っているからあえて絢香とは接触しないように気を使って、東京のインターネット店勤務に戻してくれた。今更、絢香と会うことは神様だって許してはくれないだろう。僕がお替りのコーヒーをオーダーしたその時、スマホから着信音が鳴る。手にとってみると佳子先生からのLINE通話だった。

「アキラ君お疲れ様。今、詩音ちゃんとどこにいるの？」

「今、県庁前のデパートで買い物しています。詩音ちゃんはまだ買い物中で、僕は一人でコーヒーを飲んでいるところです」

「そうなの。私たちは家元と本店に視察で来ています。詩音ちゃんと会いたいのだけれど、本店に来て貰うことは可能かしら？」

「まだ彼女がミラクルスポットで働く意思があるのかどうか解らないまま那覇にきたので、彼女に聞いてみないとわかりません。」

「では、また解り次第連絡してください。沖縄は小さな島ですから。会おうと思えばい

つでもこちらから出向きます。アキラ君はメール鑑定だけで良いですから、くれぐれも詩音ちゃんのことを最優先して下さい」

「解りました。では、またこちらから連絡します。」

通話を終わると、ウェイターがコーヒーのお替りを持ってきてくれた。ウェイターと軽い会話のやり取りをしている奥に詩音の姿が見えて、僕は手を振って合図した。詩音は僕を見つけて嬉しそうに駆け寄ってくる。手にはたくさんの荷物を持っていた。

「アキラ、どこ行ったのかと思った。探しちゃったよ」詩音はウェイターを呼びアイスレモンティーをオーダーする。荷物を空いている隣の席に置き、買い物意外と早かったねと言う。カーキ色のカーディガンを羽織っていることに気づき、お洒落じゃんと褒めてくれた。

詩音と過ごす甘い日々は永遠の物語にも思えた。占術メンターの佳子が詩音ちゃんに会いたいと伝言を伝えると、私はあまり会いたくはないと言い出した。なぜ会いたくないのだろうか。沖縄へ来た理由は、占術を学ぶためだったのではないだろうか。東京帝国ホテルの面接の時に聞くはずだった質問を詩音に投げかける。詩音は首を左右に振り、アキラと一緒にいたかただけだと言う。なんて健気な子なのだろうかと思ふ。占術を学び始めた理由も沖縄へ来た理由も、運命から始まる恋愛のためだけだったのか。だとしたら、詩音の誠意に応えなければならない。僕は強くそう思った。しかし、佳子は会社の上司である以上、僕が占術師をやめなければ関係を断ち切ることができない。もう一度詩音に、食事だけでも佳子に会ってみる気はないかと尋ねる。アキラがそこまで言うのなら、顔を立てるためにも良いと詩音は言った。佳子は占術の創始者家元の秘書であり、家元はうちの会社のグループの会長を務めている。佳子とはたぶん男と女の関係だろう。

詩音は佳子と会うのになぜ乗り気ではなかったのかをこの時はまだ知る由もなかった。

詩音はアイスレモンティーを飲みながら、どこで会うのかを尋ねてきたので、それは向こうの都合もあるし解らないと答えた。しかしながら、僕たちに車がないことを思えば、那覇近辺になるのではないかと予想している。佳子にLINEしてもよいかと詩音に尋ねて、承諾を得たので、待ち合わせ場所をそちらで指定してもらえるようお願いをした。県庁前で合流して北部のリッツカールトンへ行こうとすぐに返事がきたので、詩音にその旨を伝える。もう少しアキラと二人っきりでゆっくりしたかったのになと少しぐずりながら体を揺らす。詩音には申し訳ないと言い、コーヒーを飲み干して店員にお会計をお願いした。

那覇国際通り沿いのデパートリウボウを出ると、心地よい海風が吹き抜けていった。佳子先生にLINEをすると、国際通り沿いで拾ってあげるといっているので、そのまま詩音と共にデパートの前で待機していた。東京人の僕の場合だと沖縄は15時を過ぎてからが面白い。僕は詩音の荷物を持ってあげている。その間、詩音は自動販売機でお茶を買ってきてくれた。

南国にいると汗をかくほど暑いのでついつい水分が欲しくなる。詩音も東京の人間だから、自動販売機を使うことに抵抗はないようだが、地元の人だったら水筒でも持って出たほうが安上がりにはなるだろう。遠目から詩音を見ていると、彼女のセミロングの髪の毛が風に揺られて、太陽の光を受けて艶々と輝いている。身長はさほど高くなく、1

60センチもないほどの小柄な体系なのだが、胸がGカップもあるとあって沖縄でもかなり目立つ。グラビアアイドルにもなれそうなほど、スタイリッシュでグラマーなわがままボディを持ち、顔たちはパッチリとした二重が印象的で、誰がどう見ても芸能人のオーラを纏っていると褒めるだろう。そんな詩音と一緒にいる僕も、実は子供たちからは人気がある。昔、母親の実家近くの公園で休憩していたら、保育園児たちの集団がやってきて、声をかけてもらったり、昆虫を見せてもらったりしてかなり人気がでてしまった。その集団の一人の子から、テレビに出ている人ですか？と尋ねられたので、思いも寄らぬ発言に沈黙してしまったのである。

二人揃って街を歩いていると、人の視線をピンピンと感じる。きっと沖縄の人からしたら、瞳の大きさやあっさりした顔たちを見て、すぐに内地の人だという認識を持つだろう。詩音は通り沿いで待っていた僕のもとに帰ってきて、暑いねと言いながらお茶を手渡す。

その時、九州ナンバーの黒塗りのベンツが国際通り入り口付近に停車した。中から、白いワンピースを着た佳子先生がでて来て、僕に挨拶をする。詩音を紹介すると、インターネットではいつもお世話になっています星崎詩音です、と簡単に自己紹介をした。佳子先生は、詩音の若さと美貌に驚きの表情を浮かべながら、詩音ちゃんとってもお綺麗な人ねと褒めたたえる。佳子先生は髪の毛を後ろで束ねており、たれ目の下の涙ぼくろがとともセクシーな人で胸も大きい。とても39歳には見えないほど若く見えるのも、髪型とファッションに気を使っているからだろう。佳子先生はご令嬢の詩音を目の前にしてもさほど緊張はしておらず、自然なまま家元が運転する車へとエスコートをしてくれた。家元は車の中において、ミラー越しから顔を覗かせている。黒いポロシャツに身を包み、目つきが鋭くて年の割には精悍な顔つきをしている。僕の右隣に詩音を乗せて、僕が車に乗り込むと家元はイグニッションキーを回した。

「いやぁ詩音ちゃん沖縄まで来てくれてありがとう」家元はお客様を扱うように丁寧に言った。詩音は、琉球占術に興味があったから当然ですと返す。すかさず佳子先生が、そう言って沖縄に来るって約束しても来ない人の方が多いから詩音ちゃんはやっぱりさすが行動力が高い人だよと褒めた。すると、詩音は行動力ってやっぱり関係するんですかねと尋ねたので、佳子先生が行動力について簡単に詩音に説明することにした。行動力とは琉球占術投球の鑑定項目で、話すスピード感や行動するテンポのことを指し、通常は一億から三億が普通とされているのだが、詩音のように行動力が20億を振り切っていると、じっとしていることが苦手で、なんでも経験に勝るものはないといった感じで経験体験が増えていく傾向にあると教えてくれた。家元は行動力が8億なので、アキラ君と同じくらいのテンポで話すのが心地よいと言う。僕の行動力もだいたい8億ある。佳子先生は通常の行動力の3億なので、コツコツタイプで思慮深い一面もあるということ話を話してくれた。

ベンツでの車内講義はレザーのシートがまるで高級な応接間にいるかのような居心地の良さを感じさせてくれる。詩音はミュージシャンになる夢を語った。

「私は世間では社長の一人娘で経済的には親が支援してくれています。けれども、恋愛には親の干渉がひどくて、今までまともに男性とお付き合いしたことがありません。どうしても社長の一人娘ということもあり、男性を見る目が厳しいのです。」

「解るわその気持ち。私も親が経営者だったからお金には苦労してない青春時代だったけれど、恋愛に関してはもう親からの束縛がひどくて、それで経済的に自立しようと思って家を飛び出したの。佳子先生は助手席に座っていて、詩音の方に振り向きながら話す。

「ですから、私はアキラ君みたいに自由になりたいと思って、音楽活動をしています。たまたまインターネットでアキラ君を見つけて自叙伝を見たのです。世の中にはこんなにも自由な思想で生きている人もいるんだと思って興味が湧いて、アキラ君のSNSは全て見させて貰いました。そして、占いもやるんだと思って、興味本位で私とアキラ君の相性を調べてみたら、どんな占術を使っても運命の人と出てしまう。これって、やっぱり意識してしまうというか、それからはアキラ君のことばかり考えていました。まだ会ってもいなかったのに変ですよ」詩音は一通り話した後でうつむいた。少し、恥ずかしい気持ちがあったのだろう。

「別におかしなことじゃないよ。占いはあくまでも良い人生を歩んでいく羅針盤みたいなものだから、占いで相性が良いとでたならば詩音ちゃんにとってアキラ君は運命の人なんじゃない？」佳子先生は励ますように言う。それを受けて僕は詩音の真剣さに心打たれる思いがした。この子だけは絶対に裏切ってはならない、とそう強く思う。社長令嬢とかそんなことは関係ない。僕の夢を最大限に応援してくれている詩音のことすでに付き合いたてのカップルみたいに大切に感じている。

「そういえば今日は恭子さん本店勤務ですか？」

「恭子ちゃんはおうちのお留守番しながらインターネットやってもらっています。そのうちに挨拶に行かせるから待っててね」佳子先生はカフェラテを片手に言う。

車は海岸線の58号線をひた走る。この58号線はアメリカ軍統治下時代に整備されたハイウェイナンバー1が起源となっている。緊急時の滑走路としての利用も考えて作られていたみたいだ。車を走らせている家元は法人5社を経営しており、とてもアクティブに働いている。黒塗りのベンツは成功者の証だろう。しかしながら、今でこそ順風満帆に見える家元ですらこの占術に出会う前までは、成功と失敗を繰り返して、生きるとはどういうことかという思索を重ねたという。結論として、自分らしく生きることこそが幸福な人生の始まりであって、その自分を知るためのツールが占術だと主張している。僕は占術との出会いによって小説家になる夢ができたし、詩音だってミュージシャンになる素質みたいなものは占術結果から簡単に読み取れるのだ。詩音は58号線を走っている最中にペットボトルのお茶をちびちび飲みながら夕暮れ近い沖縄の海を眺めて、ドライブを満喫しているように見えた。家元と佳子先生は車でのミーティングを始めたので、僕はまったく詩音と会話を楽しむことにした。

「詩音ちゃんはリッツカールトン泊まったことある？」

「前回来た時に宿泊しているよ。母親と二人っきりで沖縄旅行した時に知り合いからおすすめされてね」

「いいなあ。リッツカールトンだって5つ星ホテルじゃん。僕なんか沖縄旅行の時は安いビジネスホテルか沖縄の叔母さんの家に泊まらせて貰うからさ」

「アキラのほうが羨ましいよ。リゾート地に親族がいるってことは、観光客が行かない素敵な場所に連れてってもらえるじゃん」

「それがそうでもないんだよ。」

「え？ どういうこと？」

「例えば、沖縄の親族が東京に遊びに来てくれたとしたら、定番の場所しか連れて行ってあげられない。後は自分で調べて行きたいところに行って貰うしかない。沖縄でも同じだよ。離島に行きたいのか、ダイビングがしたいのか、観光地に行きたいのか明確に伝えなきゃ向こうだって困るだろう」

「そんなものかね。なんだかバスツアーでも行けるような場所、面白みもないね」

「むしろ家元たちに連れていって貰える場所の方が新鮮で楽しいよ」

そうまで言うおいて、詩音は僕の耳元に顔を近づけて小声で囁く。

「でも、リッツカールトンだったら飽きているからなんとも言えないな。アキラと二人っきりでアメリカンビレッジとか行きたかったな」

「まあアメリカンビレッジだったら、バスでも行けるからまた落ち着いたら行こう」

僕は詩音から買って貰ったお茶を開けてグビグビと飲んだ。時計の針は15時半を指している。昔、肉体労働者だった名残で、15時近くになるとお茶休憩をとる習慣が根づいている。

カーディガンを羽織るにはまだ早くて9月半ばを過ぎても沖縄の夏は終わっていないようだった。僕はたまたまカーキ色のカーディガンを脱ぐ。肩掛けのビジネスバッグしか持ってきてきていないので、軽く畳んで手に持っておくことにした。詩音は買ってきたカーディガンを羽織ってはいないので、ユニクロのTシャツのままラフな格好でくつろいでいる。

リッツカールトンの駐車場に着く。佳子先生が一足先に車を降りて詩音をエスコートする。荷物はそのままにして、必要なものだけ持ってくるようにと言う。僕が車を降りると太陽の光が眩しくて、サングラスを買っておけばよかったと後悔する。家元を先頭に立て、高級そうな黒い鉄製ドアを開けると、トロピカルココナッツの薫りがしてここはリゾート地であることを再認識する。ロビーを抜けると、中庭に水盤があり、沖縄の透き通る海を連想させる綺麗な水がゆらゆらと光を反射して、一瞬の虹を創ってすぐに消えていった。水辺にはソファもあり赤瓦の建物が古来琉球王朝の歴史を感じさせてくれる。エントランスホールは天井が高く、清々しい空気が吹き抜けていく。ゴルフができる場所もあり、さすがは最高級ラグジュアリーホテルにはお金持ちの風貌の人しかおらず、居心地が良い。ロビーラウンジでアフタヌーンティーをすることになった。よく教育された女性店員が席まで案内してくれた。アフタヌーンティーのセットを2つと飲み物をオーダーする。佳子先生がアイスミルクティーをオーダーしたので、詩音も僕も同じものを頼むことにした。茶葉はアールグレイが一番人気だということで、同じものを3つオーダーする。女性店員は言葉使いからして、高級ホテルで働いているという自覚があるのだろう。もしも、大統領に接客するとしても、同じように対応することだろう。この意識の違いがコンビニ店員と高級ホテルのウエイトレスの差なのだ。コンビニなどなくなったとしても困らない。むしろみんな自炊をするようになってこんなにもお金が貯まるものなのかと幸福感が増すことだろう。生き金を使うのと死に金で何も残らないのでは人生の質がまるっきり違う。賢い人はお金を稼ぐだけでなくお金の使い方もスマートなのだ。ゴミをなるべく出さない生きの方が実はより多くの財産を獲得することに繋がっている。金持ちはあまり物に執着しない。

家元が詩音に気を使って、簡単に占術の勉強の進み具合を尋ねた。詩音は、ゆっくりマイペースでやってますし、アキラ君に教えて貰っているので大丈夫ですと答える。すると、佳子先生が、うちのお店で働いてみる気はないかと詩音に問う。詩音は、アキラ君とお仕事できるならば考えても良いですよと言う。それに対して、家元はもちろんアキラ君と一緒にお仕事できるしなんなら東京に実店舗を構えることも検討していると付け加えて言う。詩音は出資はどれくらいですか？ とはっきり尋ねる。すると、家元はさすが財閥のご令嬢だねしっかり考えていると感心しながら、指を三本立てて300万円ではどうですかと問う。それに対して詩音は家元に、沖縄とインターネット店の売り上げはいくら上がっているのかを聞く。ビジネスの話しになるとは予想していなかった僕は、アイスマルクティーを飲みながら隣で聞き耳を立てるだけしかできなかった。売上に関しては佳子先生が詳細にスマホの電卓を使って純利益で500万円は稼いでいると提示した。詩音は関東がターゲットですよと家元に尋ねると、その通りですよという返事が返ってきた。詩音は悪いお話しではないですけど、私も占術に関しては素人同然ですので、もう少し沖縄での運営状況などを見させて貰ってからじゃなきゃお返事はできませんと曖昧な答えを導きだした。家元はこのような返事を予測していたのか、僕たちも東京進出するにはまだ早いかもしれないと思っていますと言い始めた。詩音はそのことを踏まえた上で、ミラクルスポットの広島店や他の店舗がうまくいかなかった理由に突っ込んで話を聞いた。佳子先生が言うには、まず一つには人材不足という理由が挙げられると答えた。インターネットとリアル店舗があって初めてミラクルスポットは沖縄本店からのサポートを最大限に活用できるのだが、肝心な占術師にインターネットの知識やスキルが不足しており、ましてや研修するにしても片田舎に住む占術師とインターネット経由でやり取りするには限界があったことを挙げた。では、東京で成功する理由も今のところ何一つ根拠はないですよと詩音は鋭く指摘する。家元は顔つきが変わった。確かに詩音の言う通り成功する根拠を何一つ示せないのはおかしい。

アイドル占術師恭子ならば騙せてもさすがに有名私大卒で実家が金持ちの詩音の頭までは騙せない。佳子先生は今すぐとは言いませんけれども検討してみてくださいとやんわりと白旗をあげた。詩音はアイスティーマルクを混ぜながら、まあ占いは仕事でなく趣味と割り切ってますからお気になさらないで下さいと言い、ついでに、趣味が面白くなってきたら期間限定でやってみることも心の片隅には置いておきますからとクールに言い放った。詩音の頭の良さや機転の利く態度を目の当たりにして、なぜこんなにも冷静な判断ができる才女がヒモ男みたいな自分と婚約者という設定で疑似恋愛を楽しんでいるのか不思議で仕方なかった。

気が付けばもう暮れ時を過ぎて、太陽の入りが遅い沖縄でも少し日の光が陰ってきていた。夕食はどこで食べようかと家元が佳子先生と相談をはじめた。佳子先生は詩音にエスニック料理は好きかと尋ねると、詩音は素直なまでに好きですよと答えた。

リッツカールトンを出ると、二日月の影が見え隠れしていた。そういえば詩音の誕生日は新月だったのだ。新月は満月と同様にして特別なエネルギーが湧く日とされ、特に願いことや目標を立てるのに向いている日とされる。そういえば詩音もノートになにやら書き込みをしていた。果たしてどんな願いことをしたのかこの時は知る由もなかった。洞窟の中にいるようなエスニックレストランへ到着する。デコボコした土の塊が所々に

突き出していて、鍾乳洞の中に松明の光を差しているかのような異世界のロビーをすり抜けていく。店員はオレンジ色の布を頭に巻いていて、エプロンは真新しいホワイトカラーとベージュの質素な装い。インド奥地で修行をしている僧侶をイメージさせてくれる。テーマパークにでも来たかと思わせてくれるこのロケーションにスパイスとラッシーの甘い香りが漂っていた。先ほどから頭がボーっとしている。たぶん僕はビジネスには向いていないのだろう。話を聞いているだけでも頭の中が混乱してしまうようだ。家元に勧められるがままに詩音はお得なカレーセットを注文すると、僕も決めるのが面倒だったので同じものをオーダーすることにした。詩音がラッシーが飲みたいということで同じものを2つ注文する。袈裟姿のような衣服に身を纏った女性店員はとても小顔で可愛い顔たちをしており、南国沖縄出身の人気アーティストに似ていることから親しみやすく、詩音と2ショットの写真を撮ってもらうようお願いをした。唐突なお願いにも快く承諾してくれた女性店員は、詩音のスマホを手にして、撮りますよ、と合図をしてから2枚ほど写真を撮ってくれた。詩音のインスタグラムでは彼氏がいない設定になっている。たぶん他者に見せるつもりなどないことだろう。このエスニックレストランにはお洒落な庭があり、家元が後で散歩しておいでということで、サンセットを観ながら詩音と二人っきりで語れるチャンスが来たことに歓喜した。佳子先生は家元とビジネスの話をしている。この二人は夫婦ではないものの、切っても切れない関係性だと占術師たちは口を揃えてそ言う。二人で一人、俗に言う前世からの深い因縁であるソウルメイトであることは間違いない。話に夢中になっていると、飲み物が先に運ばれてきた。家元と佳子先生はホットコーヒー。詩音はラッシーを飲みながら、赤ちゃんのような笑みを浮かべていて、きっと優しくて懐かしい味にお母さんのおっぱいを飲んでいた赤子の頃を思い出しているのかなと僕は思った。ヨーグルトの風味がするラッシーを飲んでみると、世の中の悩みや不安など大したことないように思えてくる。大好きな人たちと美味しいものを食べて、夢や希望を語り合って、夜になれば明日が来ることを待ち遠しく思い眠りにつく。詩音の笑顔を見ていると、まだまだ子供だなと思ってしまう。それくらいピュアでまっすぐで、情熱という名の目にはみえないオーラを醸しだしている。食事を終えると家元の提案通り、レストランのお庭を散策することにした。ガラス張りの向こう側、すでに美しいサンセットが映し出されている。木製のブランコが一台あり、詩音はゆっくりと腰をかける。アキラ隣においてよ、という詩音のセリフはどこかメランコリックでどこか遠くに想いを馳せているかのように感じられた。詩音の隣に座ると、ブランコに揺られながら沈みゆく太陽を眺め、それぞれの未来を語り合った。

「過去にね、沈みゆく美しいサンセットを観ながらどうして神様は地球を創ったのかなって言った人がいたんだ。」

「どうして神様は地球を創ったのかって？ そんなの神様が創ったことが前提となっている話なんて宗教ぼくて好きじゃないな」詩音は僕の手を優しく握り締めた。

「まあ、宗教というのも人間が幸せに生きていくためにできたものだから、神様の存在自体を否定する気はない。むしろ、どうして生きているのかなって不思議に思う出来事がたくさんある。例えば、たまたま良い行いをした後に、ゾロ目のナンバーを見たとか、たまたま通りかかった車のナンバーが自分の誕生日だったりさ」

「自叙伝にもかいてあったけど、アキラは仏教徒でしょ？ 今でも信じているの？」

「熱心な信者じゃないからなんとも言えないけれど、作家として生きるならば哲学は持っておいた方が良くは思っておるよ。どちらかと言えば、キリスト教に憧れがあるんだけれどもね。もうすでに体の隅々にまで仏教思想が染み渡っているから今更だけど」

「アキラと結婚するとしても、私はキリスト教で育ったから同じ信仰はできないな」

「信仰は個人の自由だよ。それにまだ出会って間もないのに結婚するのは考えられないな」

僕がそう言うと、詩音は憂鬱そうな顔を浮かべてこちらを見た。

「アキラは私のことが好きじゃないの？」それは初恋の告白のような淡い質問だった。

「好きだよ。人としてね。僕が言いたいのは占いで相性に気を取られて何か大切なことを忘れてる気がするんだ。例えば、経済的にも詩音ちゃんの方が成功しているし、僕よりも13歳も若い。だから、まだまだ、この先好きな人ができたとしても特別な話じゃない」琉球王国のサンセットは恋人たちの永遠の憧れ。しかし、ここで甘い雰囲気流されて、大切なことを失いたくはなかった。

「人として好きって、なんか悲しい。アキラとはもう恋人だと思っていたのに残念だな」詩音は遠くの方を眺めながら泣きそうになるのを必死にこらえていた。それに気づいた僕は、なんで今までこんな大事なことを伝えずに、甘い疑似恋愛を楽しんでいたのか、神様に懺悔するような気持ちでサンセットを観た。それはアイドル占術師恭子と共に観た景色よりも儂く消えてしまいそうだった。オレンジ色の光が地平線の彼方へと沈んでいく。地球は丸くできているという当たり前のことに気づく。しかしながら、占い上では運命の人と出ている詩音とのやりとりの中で、現実を目を背けてきたことにはじめて気づくとは。

「詩音ちゃん。僕は詩音ちゃんのことが好きだよ。でも、占い上だけで判断されるのはあまり好きじゃない。こうして、一緒に深くまでお話ししてみればじめて分かり合えると思うんだ。僕たちは婚約者という設定で疑似恋愛を楽しんできたわけだけれども、そろそろ本気の恋がしたいとそう思っているんだ」僕は詩音の大きな瞳を見つめながら言った。

「それって、私とのことを真剣に考えてくれてるってこと？」

「そうだよ。お金も大事だけれど、お金がなくても二人一緒に仲良く過ごせることの方が大事だったり、仮に詩音ちゃんにお金が無くなったとしても僕が稼げるようになって助けたりしてさ。どんな時でもお互いにとって尊敬しあえる関係が一番素敵だと思って思うんだ」

「アキラ。私はアキラのこと大好きです。それ以上に愛しています。それは生涯変わることはありません。けれど、アキラにとって私が必要なければ私は生涯独身を貫きます」詩音は胸に秘めた大切な想いを伝えると、ブランコから降りてサンセットの方へ歩きだした。詩音の熱い想いにどう応えて良いのか解らなくなった僕は、詩音の後ろ姿を眺めることしかできなかった。この先の未来、二人にとって大切な人たちが幸せでありますようにと神様に祈るばかりであった。

詩音の誕生だった新月の日から、3日目を経とうとしていた。昨日、僕たちは家元の車で宿泊しているハイアットリージェンシーまで送ってもらい、詩音も疲れたと言って簡単に身体だけシャワーを浴びて早々と寝てしまった。僕はサイトの運営と佳子先生から頼まれている無料メール鑑定からのストーン製作依頼のお仕事をこなしていた。詩音

の寝顔を遠目で見ながら、赤子を寝かしつけた後の大人な時間を過ごしているような感覚に浸っていた。日付が変わる零時ごろ、ふと空腹が脳内を支配して何か食べたい衝動にかられた。ダイエットしなければならないと思いつつも、低カロリーでお腹が満たされる食品は何かないかとイメージを膨らませる。こんな時はだいたい豆腐かかそうめん小腹痛を満たすことくらいしか思いつかない。僕は空腹をごまかすためにタバコを吹かしに行くことにした。

詩音から買って貰ったカーディガンは2着あり、一つはユニクロで買って貰ったエメラルドグリーンサマーカーディガン、もう一つはデパートリウボウで買って貰ったポロのカーキ色のカーディガン。僕はお気に入りのカーキ色のカーディガンを羽織って部屋を出る。2階の喫煙所は僕以外客がいない。タバコに火をつける。非喫煙者からしたら考えられないだろうが、僕はタバコの香りが大好きだ。葉巻などはもともと香りを楽しむものとして愛用されていたらしい。タバコが辞められないのは意思の問題ではなく単なるニコチン依存症なのだ。タバコを吸うと、快楽物質であるドーパミンが出るらしい。もっともドーパミンはすぐに消費されてしまうので、また新しいタバコに火をつけてしまうのでなかなか禁煙できないようだ。ぶかぶかと煙を吐き出すと、灰色の煙は換気扇へと吸い込まれていく。

気分転換に興味である小説のアイデアでも妄想しようとしてゆっくり瞳を閉じていく。占術師が主人公の小説というのはありふれているかもしれないけれど、占術師の恋愛ストーリーというのはなかなか聞いたことがない。この占術師としての経験が生かされるとしたら、悪魔を退治するお話とか事件を解決するような物語ではなく、恋愛をテーマにした面白い作品が書けるかもしれない。僕は妄想を膨らませる。現実世界でこんなにもハーレム状態に陥っていることを思えば、世界最古の長編恋愛小説である源氏物語のように、この移ろいゆく恋心を克明に描いた作品など女性読者が喜びそうだ。

エレベーターで17階の部屋へと戻る。ふと詩音が書いた新月の願いことこのことが思いだされて、遅ればせながら僕も新月の願いことをすることにした。紙は神と繋がっていると、このスピリチュアルな世界ではそう言われている。脳の神経が身体の末端まで張り巡らされていることを思えば、手相というのも科学ではないかと考えている。ある程度、人相で性格を判断できるように、目に見えるもので占うことを相術という。この相術は人相と手相があり、表面に出ている物から占うため信憑性が高く信じている人も多い。僕の手のひらには、天下取りの手相と呼ばれる『ますかけ線』がはっきりと出ている。それ以外にも、独立向きの起業線や人からの人気によって道が開かれる人気運命線など、手相家から言わせれば成功していないのがおかしいと言われている。だが、ますかけ線自体、大器晩成運なので遠回りは最大の近道と思って生きてきた。天下を取るほどの強運の持ち主とされるますかけ線が本当に強運であるのならば、なにかしらの証拠があっても良い。僕の場合は幼馴染の元宮が音楽家として成功したことで、より一層人からの支援を受けやすくなった。彼が成功すればするほど、他力本願の僕もエスカレーター式に引っ張って行ってもらえる。幸せな人生だ。

四柱推命でひも解くと僕は壬(みずのえ)といって海の性質を持つことが解っている。幼馴染の元宮も癸(みずのと)という雨の性質なので同じ水の属性であうことが解る。元宮がサーフィンで海を楽しむことは理解できる気がする。しかし僕の場合は海で遊ばせ

て貰うなんて大それたことは考えられない。なぜならば、海には神様が住む神聖な場所だと信じているからだ。若くして海で亡くなっていった人たちがいることを。そのことを思うとサーフィンだって危険を伴うスポーツであることが解る。僕のように海にご縁があるからこそ、遠目から眺めるだけの人もいる。元宮は危険であることを充分に解っているからこそ準備を怠らない。それだけで見ている側としては安心していただけるのだ。

先ほどから、パワーストーンのリセレクトをオンラインで佳子先生としているのだが、予算の関係上、あまりぱっとしないブレスレットが出来上がってしまった。このパワーストーンといの、亡くなる瞬間まで大事に持っておこうと考える人が多い。人は死ぬときは一人だ。けれども、苦楽を共にしたパワーストーンというのは最高のパートナーなのだ。なるべく良いストーンを身に着け、自分が死んだ後は分身だと思って子供たちに託す。だからこそ、今世では意地でも成功しなければならない。まあメール鑑定から来たお客さんだからいきなり高額のリセレクトを依頼されても怖い気がする。マジカルカラーをベースとしたパワーストーンリセレクトは順調に進んでいく。予算の関係上、リセレクトできるパワーストーンが限られているからだ。僕は最後のリセレクトを確認してクライアントさんにLINEで送ると、メールボックスをチェックしてノートパソコンを閉じた。

夜だというのに冷たいブラックコーヒーが飲みたくなる。キッチンへと向かい、冷蔵庫を開けて、ペットボトルのコーヒーと氷を取り出す。それをグラスに注いでミルクを入れる。

日つけが変わる時間までお仕事していると、クリエイティブな職種には時間という概念が曖昧だということに気づく。アイデアだけで勝負しているから、自分の頭だけが頼りだ。

頭を使う仕事をしているとどうしても甘いものが欲しくなるようだ。脳内の働きというのは、肉体を使うよりも消費カロリーが多いと言われている。頭脳労働者にやせ型の人が多いのも関係していることだろう。人間の欲求には5段階あるとアメリカの心理学者のアブラハム・マズローが説いている。一番には、生理的欲求、続いて安全の欲求、社会的欲求、承認欲求、そしてピラミッドの最後に自己実現欲求という順番で続いている。占いに来る人には承認欲求を満たしたい人が多い気がする。誰からも必要とされていない疎外感を感じていて、誰かから認められたいと願い、占いにこられるのだ。夢を叶えたいという人はすでに承認欲求が満たされていて、自己実現欲求が高まっている証拠だろう。

僕はどうせ明日起きたら後悔するだろうと先読みして、何も食べずに寝る支度を始めた。

詩音のベッドは窓際にある。可愛い寝息を立てながらすやすや寝ている。どんな素敵な夢を見ているのだろうか。心なしか笑っているようにも見える。その寝顔をこの先もずっと守っていきたくと、新月の願いことに追加した。明日の予定はまだ何もない。無料メール鑑定をこなしながら、暇を見てストーンのリセレクトをする。うちの会社は占術が売りの会社なのだが、パワーストーン売り上げが一番高い会社なのだ。パワーストーンを月あかりの下に置く。これは浄化と言われる作業で、一日の終わりにパワーストーンを寝かしつけるようなものだ。パワーストーンは自然界から採れたものなので、同じく自

自然界の持つ周波数と共鳴するようにできている。水晶は圧力を加えると電気が発生する。現代では時計などに水晶が使われていることをついつい見落としがちだ。パワーストーンに力があるのかと問われれば、信じる人にだけ奇跡が起きると抽象的に答えることしかできないが、間違いなく美しいストーンには人に行動を起こさせるだけの力がある。

僕はカーテンを少し開いて、窓の外を眺める。美しい二日月が上っている。古代の賢人は星々を頼りに旅をしていたに違いない。そのうちに、星々にある一定の法則があることに気づき、暦を発明した。数字のゼロという概念もなかった時代には、太陽が地球の周りを動いていると信じられていた。命を運ぶと書いて、運命。一体、どれだけの月日が流れれば運命の人に出会えるのだろうか。それとも、占いの結果通り、詩音が運命の人なのだろうか。僕にはまだその実感はない。詩音は確かに可愛いしグラマーだし、しかも金持ちだ。婚約を断る理由など何一つない。ただ、僕は占術師でありながら、人には運命の人との出会いについて偉そうにお話するし、鑑定結果を見ればソウルメイトであるか否かはすぐに解るけれど、自分のことについては何一つ解っていないに等しい。それでも、ただ一つ解っていることと言えば、小説家が天職であるということだけだ。

僕はいつの間にか寝ていた。太陽の光が差し込む朝になるとタバコが吸いたくて目が覚めた。昨晚見た夢の中では、幼馴染たちがたくさん登場して楽しい夢だった。断片的に覚えているのは、幼馴染の元宮と引きこもりから救ってくれた新城という友人が出てきて、仏法の道へと誘われて、最終的に僕はキリスト教の道へと進むという夢だった。ふと寂しい気分になり詩音の姿を探した。ベッドはもぬけの殻で、キッチンへと視線をやる。そこにはカップ春雨を食べる詩音の姿があった。お腹が空いたのか初日にコンビニで買って来たカップ春雨を食べて幸せそうな表情を浮かべている。僕はベッドから出て、キッチンへと向かう。

「おはよう詩音ちゃん。」

「アキラおはよう。カップ春雨食べてるけどアキラも食べる？」

「いや、僕は起き立ってでそんなにお腹空いてないから。後で、ルームサービスでも頼むよ」

「BLTサンド美味しかったもんね。私もルームサービスがいい」

「ところで、ミラクルスポットで働いてみる気は出てきた？」

「アキラが教えてくれるなら働いてみてもいいかな。ねえ、占術師同士のカップルというのも素敵だよ」

「占術師なんて水商売みたいなものだから、世間的には理解されないカップルだ」

「ミュージシャンだって水商売だよ。あれは音楽を売っているというよりも人間性を買って貰っているんだなあと思うよ」詩音はカップ春雨をポンと置いて強く主張する。

「そうかもしれないな。だったら、僕たちが占術師の社会的立場をあげればいい」

「どうやって？」

「例えば、小説家として成功した後も占術師として活動したりしてさ。占いってのは小説家としても面白いテーマだと思うんだ。それに占い師よりは小説家の方が社会的にも生きやすいと思っている」

「昔は、自殺する文豪がいたりして生きつらかったみたいだよ。でも、今後はますますリモートワークが主流になっていくと思うの。だから、どんな時間にどんな場所にいるようにも無職みたいに思われることはなくなっていくんじゃないかな」

「僕も時間が自由な仕事をしているから、近所のコンビニでは働いてないんじゃないかと疑われることがしょっちゅうあるよ。あなたたちの何倍も世の中に価値を生んでますよと思うから無視するけれどもね」

「しょうがないよ。コンビニのおばちゃんだもん。勝手に憶測だけで人を判断して、嫌な気分させる。だから、私はコンビニはあまり好きじゃないな。セルフレジの方がマシだよ」

詩音との雑談は永遠に続くものと思えた。たわいもない話でこうして盛り上げられること自体、相性が良い証かもしれない。

時刻は11時過ぎを指している。詩音がお腹が空くのも当然だ。朝と昼を兼ねた食事をランチと言うらしいが、だいたい11時くらいから午後1時にかけて食事をとるのが一般的なランチらしい。飽きもせず昨日と一緒のBLTのセットを注文する。だいたいいつも昼飯は同じものを食べ続けても平気なタイプだ。詩音もあまり食にはこだわりがないみたいだし、それよりも時間を買うという考え方ができる人が成功するのかもしれない。

運ばれてきたBLTサンドを食べながら、スマホでメール鑑定の文面をつくっていく。詩音はつまらなそうにインターネットテレビを覗いている。ご飯の時くらい構ってあげたいのはやまやまなのだが、いつ仕事の依頼が来るのかもわからない占術師だから気持ち的には24時間いつでも仕事できる体制をとっている。それに、メール鑑定さえ終わらせてしまえば自由な時間なのだから、後でいくらでも構ってあげられることを思えば、目の前にある鑑定に集中することこそが詩音のことを思いやる愛情へと繋がっていると思うのだ。

「詩音ちゃん放置してごめんね。後で、ミラクルスポットの本店へ行こう。昨日のパワーストーン選びの続きをやりこせ」僕は窓際の椅子に座りながら詩音に声をかける。

「ええ、本当に？ 私のパートナーストーンに巡り合えるかな？」詩音は目を輝かせる。「きっとみつかるはずだよ。あと数件でお仕事終わるから準備して待っていて」僕がそう促すと詩音は着替えを持ってバスルームへと向かった。

「先にシャワー浴びちゃうね」詩音は遠くからそう言うと詩音の裸が脳内に沸いてきて、僕は勃起した。なぜこんなにも近くに理想の人がいるというのに身体の関係を持たなかったのだろうか。恰好つけてセックスなんていつでもできるなんて言った自分のこと馬鹿だと思う。詩音のGカップの胸に泡がついてシャワーの水が乳首に触れるたび快感を覚えているかもしれない。僕はまだ何も知らなかった。詩音の男性経験については。

メール鑑定を終えてスマホを置く。バスルームからはドライヤーの音が聞こえていて、詩音は服に着替えたのだと推測する。ルームサービスで頼んだオレンジジュースを飲み干して、僕もシャワーを浴びるべきか迷っていた。マスターベーションがしたくて仕方ない。一回射精しとかなければ、変な気分になってもおかしくなかった。いや、すでに変な気分になっているのだろう。僕は詩音にシャワーを浴びて良いかと許可を得てから、着替えを持ってバスルームに入った。服を脱いでいる途中、自分のペニスが完全に勃起していることを視覚したら、余計にエッチなことがしたくてたまらなくなり、僕は駆け込むようにバスルームに入った。排水口の近くに詩音の毛が一本落ちていた。髪の毛なのかそれとも、大事なところの毛なのか。妙に興奮してしまった僕はたまらなく、泡立

てたボディークリームをペニスに塗りたくり、マスターベーションを始める。脳内で詩音と激しく陰部をこすりあう。詩音のグラマラスな胸を揉みしだき、唇にキスをして舌をなまめかしく絡ませあう。僕の右手はゆっくりと、しかし、滑らかにピストンする。その時、シャワー室の向こうから詩音の声が聞こえて、現実に戻される。アキラ、春雨ヌードル貰っていい？ という詩音の声だった。

現実に戻された僕の脳内は萎縮しペニスも完全に萎えてしまった。それでも、なんだかエッチなことがしたい衝動に駆られて、何度かマスターベーションを試みたのだが、絶頂に到れずに、いたずらに時間だけが消費されていった。詩音にばれたら恰好悪いと思い、急いで身体を洗って、バスルームを出た。化粧室の鏡に映る自分の顔を見て、最低だ、とつぶやいた。詩音にエッチさせて欲しいだなんて、どうかしている。13歳も年の離れた女の子と性行為に及ぼうとしている自分の心がせつなくて、髪の毛を掻きむしった。

髪の毛を乾かし、何食わぬ顔で詩音にお待たせといった僕だったが、心の中では性欲が優位になり、もはや本当に詩音のことが好きなのかどうかは、身体を重ねた後でなければ解らないという状況になってしまったのである。

詩音は不思議そうな顔してどうしたの？ と聞いてくる。さっきまで脳内でセックスをしていた相手が目の前にいる。僕ははじめて視線を逸らしてなんでもないといい、冷蔵庫からサイダーを飲んだ。絢香とのセックスが脳内を過る。アラビアの熱帯夜みたいな暑い夜だった。朝明けに結ばれた二人は、台風という自然現象によって引き裂かれ、僕は東京に帰る決心を固めた。アイドル占術師の恭子と台湾と沖縄のハーフの絢香と、多重恋愛に陥ってしまった2週間前の出来事を思い出す。今、婚約者という設定で疑似恋愛を楽しんでいる詩音との間には、何一つやましいことはなかったはずだった。しかしながら、本人がすぐ近くにいるにも関わらず、マスターベーションするという欲に溺れてしまった僕は、3人目の恋人候補として詩音を意識し始めていた。

詩音と一緒に那覇国際通り沿いにあるミラクルスポット本店へとでむくことになった。まだ夏真っ盛りといった沖縄の気候のせいもあり買ってきたカーディガンを腰に巻いて、ラフな姿で外出することになった。途中にあるお土産屋さんでサングラスを購入した。目にかかるくらい長い前髪をサングラスで持ち上げると、刈り上げたサイドが見え隠れしてお洒落だと思う。詩音もサングラスを購入して、それをネックレスにかけてハワイにでも来たかのようなセレブ風のお洒落を楽しんでいる。

ピンク色がテーマカラーのミラクルスポット本店へと到着すると、詩音は色とりどりのブレスに興味深々と言った具合でショーケースの中を覗き込んだ。奥の方から女性の占術師が出てきた。絢香ではないかと思い、一瞬緊張が走ったけれど、アイドル占術師の恭子だった。恭子はオレンジ色が眩しいタイトなドレスに身を纏っていて、彼女の大きな胸の膨らみまで手に取るように解るセクシーな格好で登場した。

「アキラさん。お久しぶりです。お隣にいらしゃるのは彼女さんですか？」恭子が悪びれもなく尋ねると詩音はむっとして「婚約者です」と答えた。

「彼女は星崎詩音ちゃんと言います。いちおう婚約しています。」

「ちょっとアキラ。なによ、いちおうって。仕方なく婚約しているみたいじゃん」

「アキラさんって彼女いたんですね」そういうと占術師恭子は落胆した顔をした。

「今日は詩音ちゃんのブレスレットを買いに来ています。何かおすすめのスートンはありませんか？」僕がそう言うと、恭子は奥の方にとっておきのスートンがあると言って白い手袋をつけて奥へと下がっていった。

「アキラさん。お待たせしました。今月は入荷が多かったのですが、すぐに売れて言っ
てしまってなかなか良いスートンが残っていないのです。けれども、大切なお客様が来
た時のためにとっておきました。」

恭子は紫色が美しいパワースートンを手にして、詩音に着けてみるように促す。

「うわあー美しい。水晶の中にたくさんいろんなのが入っているみたい」詩音は感激して
呟く。

「スーパーセブンというパワースートンですよ」恭子は甘い声で言うと詩音はうっとり
してスーパーセブンと呟いた。

「スーパーセブンは、一つの石の中に七つの鉱物の成分が含まれている特殊な石です。水
晶、アメジスト、スモーキークォーツの3種類のクォーツに、ゲーサイト、レピドクロ
サイト、カコクセナイト、ルチルが含まれています。さきほど確認したところ、詩音さ
んの鑑定結果にはマジカルナンバーが7と出ていますので、スーパーセブンはぴったり
なんじゃないなと思います」恭子はいまあるスートンの中ではスーパーセブンが一番お
すすめだと言う。詩音は買う気満々で、クレジットカードを恭子に手渡し一回払いでと
告げる。

「詩音ちゃん、よかったじゃない、こんなにも早くパートナースートンに出会えるなん
て、運命だよ」僕はスーパーセブンに見入っている詩音に声をかける。

「運命か。なんだか、家族が一人増えたみたいで嬉しいな。私、一人っ子だからまさか
パワースートンが家族の仲間入りするとは思ってもみなかった」

「詩音さん。とてもお似合いですよ。私もゴールドルチルに出会うまでは、孤独な人生で
した。けれども、墓場までも一緒に添い遂げてくれると思うとなんとか、実際の家族や
恋人以上にパワースートンが可愛くて仕方なくなりました」恭子は自分の体験談を語る。

「そういえば、恭子さんは恋人いないのですか？」詩音は悪気なく尋ねる。

「私の理想はアキラさんみたいな、中性的で優しく、ミステリアスな男性ですから。そ
んな理想な人はそうそういません。だから、詩音さん、どうかアキラさんと幸せになっ
てくださいね」恭子は詩音の質問に真面目に答えた。

「あ、すみません。失礼なこと聞いちゃったかな。アキラ君が理想ならば、ちょっと他
にはいないタイプだから探すの苦労しますね。恭子さんとは恋のライバルってことだ」

「いえ、あくまでも理想を言っただけです。詩音さんとアキラさんの邪魔をする気はあ
りませんから大丈夫ですよ。あくまでも、同僚として最大限応援していますから」恭子
は清々しい顔を浮かべている。たぶん、今まで隠していた恋心を告白したことですき
りしたのだろう。僕は恭子の胸のうちを聞いて、何とも言えない気分になった。僕だっ
て詩音のことがなければ、恭子との恋愛を選んでいたことだろう

恭子はまだ29歳。僕より6歳も年下だけれども、男女間の結び付きが一番多いのは7
歳差くらいだから、話が合う。詩音はまだ23歳。あどけなさの残る顔たちや落ち着き
のない立ち振る舞いを観ていると、さすがの僕でも対応に困ることがある。恭子とだっ
たら、言わなくてもある程度解ってくれているような気がするのだ。

詩音は腕にスーパーセブンを身に着けて、得意げに僕に自慢してきた。ねえ、このパワーストーンアキラには買えないでしょう。確かに、僕にはスーパーセブンを買う勇気はない。しかしながら、クオリティーの高いゴールドルチルだったらいつでも購入する意志はある。詩音のパワーストーンを褒めてあげると、ますます気に入ったようで、完全に別世界へと想像力を働かせているようだった。

「恭子さん、今日はありがとうございます。おかげ様で良いパワーストーンに出会えて、とても喜ぶ顔を見ることができました」

「はい、とってもお似合いですよね。ところで、絢香さんとは何かあったのですか？」
恭子の問いかけに対して、不思議な感覚に捉われてしまった。

「いえ、特別なことはありません。絢香先生がどうかしましたか？」

「最近、様子がおかしいんです。妙に優しくったり、東京に行くためにお金貯めなきゃって張り切って休日出勤したりして。なぜ、そんなにと東京に行きたいのかははっきりと教えてくれないのですが、もしかしたらアキラさんに会いたいのかなって思うことがあるんです」

恭子は淡々と事実を述べた。僕はそれを聞いてなんとも痛まれない気持ちになっていた。絢香が僕のことをあきらめていないとすると、婚約者である詩音と顔合わせさせるのは自殺行為に等しい。絢香の気持ちを裏切ってしまった現在となっては、詩音との疑似恋愛の結末でさえ信じて良いのか解らない。ところで、詩音には特別な人はいないのだろうか。ふと、疑問に思う。こんなにも、魅力に溢れている詩音のことだから、お金のことは抜きにしたとしても、数多くの異性を虜にしてきたに違いない。まだ23歳と若くて、容姿端麗、スタイル抜群、その上お金持ちのご令嬢ときたら身を割いてでも結婚したい男がいるに決まっている。僕はまた他人から嫉妬されるネタが増えてしまったようだ。もともと、女性社会で生きてきたために異性の扱いは上手なほうだ。話しが面白い人が良いと女性は口々にするが、それは私の話しを面白そうに聞いてくれる人、すなわち聞き上手な人が女性にとっての話しが面白い人なのだ。変に気取って、面白くもない話を延々と喋り続けるのも才能のうちだとは思いますが、女性ウケは悪くなる。人は話したい生き物なのだ。一方的に話を聞いて相手が満足したら切り上げる。女性が喜ぶポイントをおさえて自然と距離を近づけていく。モテる男には共通するポイントが幾つもあるが、相手の側に立って考えられることが大前提としてある。僕は3歳年上の姉がいるから、自然と女性には逆らわないような生き方が身についている。現在、詩音や恭子、絢香など複数の異性から好意を寄せられているとして、それは僕が八方美人だという証明にもなるだろう。こんなにモテていたとしても、最後に選べるのはたった一人。それは誰しもが逃れられない運命なのだ。成功者たちが愛人をつくって不倫したとしても、いずれは悪事がばれて世間からバッシングされる。女性週刊誌の記事などを観ていると浮気や不倫をして良いことなど一つもないことに気づかされる。それは、現在の僕にとっても同じことで、いくら複数の女性からアプローチされたとしても、それは僕に魅力があるのではなく、女性の方が自信を無くしているだけの話なのだと思う。

詩音は腕に着けたスーパーセブンを撫でながら次はどこに行こうかと催促した。僕は恭子との雑談もそこそこにして、詩音をデートに連れて行かなければならない。なぜならば、今後のミラクルスポットの命運を握ってるのは星崎財閥の一人娘である詩音にあ

るからだ。

「詩音ちゃん、次はどこにいきましょうか？」

「せっかくだからミラクルスポットの那覇新都心店にいきましょうよ」

「那覇新都心？」僕は一瞬、返事をためらった。那覇新都心店の店長は絢香だからだ。

「そう。やっぱり東京でパワーストーン屋さんやっても良いかなあって気になってきたので、運営状況を見たいのよ」

「東京にミラクルスポットを？」

「そう。那覇新都心店はワゴン車で運営しているんでしょ？ 東京は家賃高いけれど、移動式のパワーストーン屋さんならば夕方に出店しさくっと帰ってこれるから家賃かからないじゃない。まあ、どこに出店するのはまだ解らないけれど」詩音がそう言うと、恭子も大喜びで東京進出の夢を語った。僕としても悪い話じゃない。むしろ東京進出のために頑張ってきたのだから喜ぶべき場面だった。しかしながら、これから向かう那覇新都心店の店長絢香との久しぶりの再会に怯えていた。あんな風に捨てるようにして別れたのだから、同じ会社で働いていることの方が不思議で仕方ない。しかしながら、インターネット店であるならば、沖縄と東京という物理的な距離があるので、まだ大丈夫だろうと簡単に考えていたのだが、詩音の登場により沖縄に連れ戻された現在となつては絢香との再会は避けて通れない出来事かもしれないのだ。昔、身体の関係を持った女の前に、婚約者を連れて帰ってくる。この危機的状況を詩音はまだ解っていない。絢香はマジカルカラー緑でぱっと見は癒し系なのだが、かなり嫉妬深く時によっては暴れることさえあるのだ。

「アキラ、さっそく案内して、那覇新都心」詩音は買ったばかりのスーパーセブンを撫でながら準備をはじめた。もうここまで来たらどうにでもなれと僕の一念は定まった。

恭子に挨拶をして、ミラクルスポット本店を後にする。テンション高くはしゃぐ詩音を横目にして、タクシーを拾った。以前来た時にも、同じようにタクシーを使って那覇新都心へ向かった。その時はやたらと喋る運転手にあたってしまったのだが、詩音と二人でいると旅行に来ている新婚夫婦にも見えるのか運転手も無言のまま車を走らせていた。

タクシーの窓際からモノレールを目で追いかける。もう那覇新都心に着いているようで、僕は運転手に通り沿いで止める様に指示した。電子マネーで支払いを済ませ車を降りる。

9月も半ばというのに焼けるような日差しが詩音と僕を照らしていた。眩しくて、サングラスをかける。詩音は初めてきた那覇新都心が気に入ったようで、スマホから写真を撮っている。流れていく風の香りにほんのりと塩気が混じっている。海風が吹くとTシャツの肌触りが心地よい。ミラクルスポットの那覇新都心店であるピンク色のワゴン車が止まっている通りまで出ると、僕の体に緊張が走った。折り畳み式のこじんまりとしたテーブルに椅子が並べられている。奥の方で占術詩が作業をしている。大きな瞳、彫りの深い顔たち、緑色のドレス姿、間違いなく占術師絢香だった。

詩音はミラクルスポットのワゴン車を見つけると喜々として駆け出した。僕は詩音の後ろ姿を見ながら、絢香と詩音がなにやら仲良く談笑しているのを眺めていた。詩音が遠目から手を振り早く早くと催促をするので、僕も意を決して絢香の元へ駆け足で向かった。

「アキラ、久しぶりだね。元気そうじゃん」絢香は何事もなかったかのように立ち振る舞った。

「絢香先生のほうこそ変わらずお綺麗ですね」

「今更気づいてももう遅いよ。お連れの子、婚約者なんだってね」

まさか詩音が先制攻撃で婚約者という設定を話していたなんて知る由もなかった。詩音は僕の腕に掴むようにして、「運命の人なんです」と付け加えた。

絢香は面白くなさそうにして、運命の人がいるのだったら私も早く会いたいものだと投げ捨てた。勘の良い詩音は絢香の下心を見抜いたのか「絢香さんにもきっと運命の人が現れますよ、アキラのような理想の人」と言って絢香を挑発した。

「詩音さん、それって私がまるでアキラのこと好きみたいな言い方じゃない」

詩音は「あれ？ 違うんですか？」ととぼけてみせる。絢香はマジカルカラー緑の癒し系の雰囲気とは裏腹に、感情をむき出しにして「所詮、過去の男ですから」と言った。

「アキラのこと諦めてくれたんですね？ 良かった」詩音は胸を撫でおろす。

「諦めるものにもアキラとのことは一瞬の火遊びですから」絢香は怒りが収まらないと言った様子で言わなくても良いことまで話した。僕は早くこの場から離れたくて仕方なかった。さっきまでの友好的な雰囲気から一転して僕が登場した瞬間から修羅場になってしまったのだ。絢香は僕との情事を火遊びと言った。理由はないがその言葉が悲しかった。

「まあ、アキラだってどうせ抱くならばヴァージンの方が燃えるでしょうから」

詩音の過激な発言に絢香はますます感情をあらわにした。

「あなた本当にヴァージンなの？」

「悪い？」

「アハハ、笑っちゃう。ギャルみたいな恰好して男に抱かれた経験もないなんて」

絢香は勝ち誇ったかのように言い放った。が、詩音は憐みの瞳を絢香に投げかける。

「アキラが絢香さんとの間で何があったのかは知りません。けれども、私は身も心もアキラに委ねるつもりです。そのためには、ミラクルスポットを東京に出店しても良いと考えています。だから、アキラのこと忘れてあげてください。私が言いたかったのはそれだけ」です」

「よくいるのよねえ、あなたみたいなお客さん。男について何一つ解っていないくせに、男のことを分かったような口をきく。そのくせ、自分に都合が悪い話になると耳を傾けない」絢香は占術師としての立場上、初級鑑定師の詩音や僕よりも上であることを誇示した。

「何が言いたいんですか？」

「ヴァージンだからって嬉しいって思っている人は単にモテたことのない人の幻想よ。男はより多くの子孫を残すようにできているの。だから、あなたみたいなめでたい人には解らないだろうけれど、アキラだってヴァージンって聞いたらめんどくさくて迷惑じゃない」

絢香はもっともらしいことを言ったが、果たしてこのどうでも良い意地の張り合いを止める手段はないのだろうか。僕は詩音がヴァージンと聞いて確かに重いなどは思った。しかし、絢香が言うみたいに、ヴァージンだからってめんどくさいとかは思わない。む

しろ、解っていないのは絢香のほうだ。女は最後の人になりたがり、男は初めてのひとになりたがるという話を聞いたことがある。詩音のような完璧無比な女の子がヴァージンをささげるとするのは重い話しではあるが、純真無垢な心を全て自分に傾けてくれるのは嬉しい。比べられる対象がないから、これからたくさんの思い出を共有して仲良く暮らしていけるかもしれない。絢香と詩音の口論は無駄なようでいて、幾つもの考えるきっかけを与えてくれた。そして、絢香にとって、僕は過去の男だということも確認できた。それだけで満足だ。しかし、絢香は腹の虫がおさまらなかった。

「アキラ、いいのよ。いつだって私の元に帰ってきてよね。私はあなたを責めたりしない。むしろ、あなたが異性にモテるところですら魅力に感じているの」

絢香が一瞬泣きそうな顔をした。たぶん強がりと言っても寂しかったのだろう。東京に来るために、休日出勤をしてお金をためていたことも、一人きりの部屋で布団の隣になくなった男の影を探していたことも、全ては僕が招いたことだった。あの夜、勢いに任せて絢香を抱き寄せてしまったことをひどく後悔している。恭子との間にあった物理的な距離さえなければ、きっと僕は恭子を恋人に選んでいた。詩音が現れるまでは。詩音と過ごした3日間、息つく暇もないほどたくさんの思い出ができた。

「絢香先生。僕は何も言う権利はありません。けれども、結婚の適齢期の絢香先生とお付き合いするのは気が引ける思いがして勝手に東京に帰りました。絢香先生には幸せになって欲しいのです。僕には絢香先生を幸せにできるほどの財力はありません」

「財力だなんて気にしてないわよ。子供だってまだ先の話しでも良いんだし。アキラは勝手に勘違いして東京帰ったけれど、私だって占い師だから一般的な結婚には向いていないのよ。こうして婚約者を連れて来られたって私はそんな運命の人なんて信じない」

「私もアキラも東京の人間です。沖縄は本当に魅力溢れる島だけど、私たちからするとなんていうか刺激が足りないんです。絢香さんとは恋のライバルってことが解りましたけれど、私はアキラとの運命を信じていますから。むしろ、運命だけを信じています」
詩音は毅然として絢香に対抗した。婚約者という設定で沖縄に来たものの、なぜそこまで僕にこだわるのかは謎だった。こうして元恋人の絢香を目の前にしても一歩も引く様子もないことを思えば、ますます謎は深まるばかりだった。詩音が言うように沖縄は魅力あふれる島だし、定年後は移住してスローライフを送るのも素敵だと思う。しかし、やはり一度でも東京に住んでしまうと、あまりの便利さに慣れてしまい離れがたくなってしまふ。

「それで、ミラクルスポットを東京に進出させるなんて馬鹿げた話し。本当にうまくいくと思っているの？」絢香は半ば呆れた顔をして言う。

「そんなのやってみないと解りませんよ。それにアキラは占術師ではなく本当は小説家になりたいんですから。絢香さんにアキラを支えるだけの財力はあるんですか？」

「馬鹿にしないでよ。占術師だってピンからキリまでいるわ。私くらいになれば年収1000万円は悠に稼いでいるんだから、充分でしょ？ あなたこそ金持ち面してなんなのよ」

「年収1000万円くらいで威張らないで下さい。エリートサラリーマンならば稼げるお金じゃないですか？ 私は資産の配当金だけで悠に億を稼いでますから」

詩音と絢香の言い争いは無限に続くものと思えた。しかし、勝ち目がないと観念した絢

香はまだ仕事が山ほど残っているし邪魔だから帰ってと言って、詩音は僕の腕を引っ張りタクシーを拾って北谷にあるアメリカンビレッジに向かうことになった。

海沿いの58号線を車がひた走る。詩音は疲れたのか無言のまま瞳を閉じている。僕はアメリカンビレッジに行くのははじめてなのでさぞお洒落な場所だろうとわくわくを隠しきれないでいた。詩音と絢香と恭子、この3人の女性から好意を寄せられていることに関して、サークルクラッシャーという言葉が浮かんだ。サークルクラッシャーとは男が多いオタク世界の中にあえて一人で飛び込む女性のことで、男女比率からしてモテモテになる確率があがることを狙っているのだ。男社会の中でお姫様扱いされることはさぞかし気持ちいいことだろう。サークルクラッシャーの逆、つまり僕のように女性社会の中に飛び込んで、モテまくるというのもよくある話だ。しかしながら、狙ってそうなるわけではなく、たまたま興味関心が向くものに女性向けの趣味が多いというだけなのだ。しかも、セラピスト業と比べても、うちの占術師は美人が多い。なぜそうなるのかと言えば、見た目採用をしているとしか考えられない。セラピストと違い、占い師は見た目も大事だ。昔、英会話スクールに通ってたことがあるが、先生やアドバイザーはやはり見た目が良く教養もあるので恋愛対象としてみられる傾向が強いのだ。セラピストは施術している時には顔を見られることはない。占い師ならば顔をみながら話さなければ信頼されない。腕さえよければなんとかなるセラピストとは違い、占い師は人気商売なのだ。顔が良ければそれだけで会社に利益を出すことが期待される。詩音だけでなく、絢香も恭子も美人なのは決して偶然ではない。家元から顔で選ばれて入社したのだ。一方で僕はといえば、顔に自信がある方ではない。サークルクラッシャーのように女性だらけの職場でモテているだけにすぎない。詩音も絢香も恭子も、きっとよそに行っても人気が出るタイプの人を羨ましく思う。

若い時にモテなかった苦い思い出が僕をモテ男へと駆り立てる原動力になっている。若い時には、いい女を年上の男に持っていかれてだいぶ悔しい思いをした。現在となっては若い男から嫉妬されるほど女性の扱いが上手になった。経済的にも豊かになり、才能に磨きがかかり、読書をして知的な雰囲気をつくり変えて変貌を遂げた。後は自己実現欲求の小説家になる夢を叶えることこそが唯一の願いでもある。それ以外には、結婚しようと考えたとしても、相手の女性には困らないほど候補がいるのだから、小説家になった後のことは何が生きがいになるのか見当もつかない。子供が生まれたら子供のお世話が生きがいになるのかもしれないし、妻と旅行を楽しむことだって楽しいと思うが、小説家というのは良い作品が書けなければ、深い海の底に沈むような苦い思いをするに違いない。一般的に考えれば、良い人と巡り会って、結婚して家庭を築く。それ以上の幸せなど一体何があるのかと思うかもしれない。しかしながら、才能を華開かせるという一点において、僕の場合は音楽やイラストなどで試してみた結果、最終的には文章を書く才能だけが残ったのである。

一番わかりやすかったのは、その才能がお金になるかどうかであった。音楽で稼いだのは、たったの1000円。稼いだというよりも食費を恵んでもらったといった方が正しい。イラストに限っては、売り上げが1000円にも満たなかった。所詮、趣味レベルなのである。しかし、文章のスキルを磨いていくと、広告やメール鑑定など収入に直結することが解った。コピーライティングのスキルと小説を書くスキルは違うようで似て

いる。それは、たった一人のために書くという点である。マーケティングというスキルと組み合わせるとさらに良い。読者さんのニーズをくみ取って、より多くの読者にアプローチできるテーマを考えるのである。今年の運勢など書かれた占いの本が累計で100万部売れていることを思えば、占いに対するニーズはある。問題は占いの本を買う読者さんのニーズが自分のことを知りたいという欲求がもとにあることに対して、占い師が主人公の小説にニーズがあるのかという疑問である。ミステリアスでいて、非現実的。占い師というのは、目には見えないものを扱う性質上、どこか文学的に感じる。昔は幽霊などいないと信じていた。しかし、不思議な事象を追い求めるうちに、霊的な何かが存在するとはっきり確信が持てるように変わった。その霊的な何かを指して、人は神様だの仏様だのと名前を付けて呼ぶ。占いが一部のひとたちから非科学的であると叩かれながらも、今日まで廃れなかったのは、みんな本能的には霊的な存在を信じているからだと考えている。紙には神が宿る、という言葉が示すように、人間の念には想像以上の力が隠されている。その偉大なる力を使って、小説家は白紙の原稿用紙を前にして、すらすらと文字で埋めていく。こんなにもエキサイティングでかつミステリアスな世界があることを。少し前の僕だったら、白いキャンパスノートを渡されて何か自由に書いて欲しいと言われたとしたら、頭の方が真っ白になって気が狂いそうになっていたはずだ。自由度が高すぎて逆に何を書いて良いのか解らなくなる。現在となっては一日に原稿用紙10枚を書くことが当たり前の生活になっている。締め切りの間際には、20枚以上書くこともある。プロの小説家は言う。作家が偉いのではなく、締め切りが偉いだけだ、と。夏休みの宿題はぎりぎりになってから手を付けるタイプだった。しかしながら、社会では毎日コツコツと積み上げるタイプの方が重宝される。しかし意外なことにコツコツタイプで大成功した人は少ない。コツコツやれる才能とは上司の言うことを素直にそのままやれる才能のことであり、それ以上にはなれない。僕のように夏休みの宿題を短期間でやりきるタイプには小説家のような歩合制の働き方が向いている。書ける時に書けるだけ書く。そして、時代の流行に合わせて読者さんのニーズにこたえていく。クリエイティブな才能は、現代社会を生きる上で必要不可欠になりつつある。

そんなことをふと思ってスマホを手に取り、ブログの記事にまとめていく。隣にいる詩音はぼんやりと窓の外を眺めている。詩音は空想に耽った後、思いの丈を語りだした。

「ねえアキラ。今日、ホテル帰ったらさ…」

詩音はそこまで言って口をつぐんだ。

「ん？ ホテル帰ったら、何食べようかって？」

「違う。食べ物なんかなんでもいい」

いよいよ詩音の考えていることが解らなくなった。

「んじゃ、何？」僕はまったりとしてお茶を飲みながら尋ねた。

「セックスしようか」詩音はそう言う僕の手を強く握りしめた。タクシーの運転手にまで聞こえたのか咳払いする音で僕は正気に戻った。

「詩音ちゃん。悪いけれどその話しはアメリカンビレッジに着いてから聞くよ」

「うん」詩音は顔を赤らめてまた窓際へと顔を向けた。無言のままタクシーは走る。

絢香とのやりとりの中で一瞬の火遊びという言葉が出た。そして、詩音がまだヴァージンであることも解った。詩音は早く男性経験をしたくて焦っているのだろうか。セッ

クスしようかと簡単に言われても、性欲盛んな頃とは違い、35歳にもなるとセックスは単なる雰囲気を楽しむためのおまけでしかないことを詩音は知らないだろう。若いころはそれこそ、あそこさえ勃起すれば相手は誰でも良かった。太陽が青く見えるほど、何度も何度も射精しては、愛しあって、一日に7回も相手を求め続けた。刺激に慣れてくると、また新しい刺激を加えなければ性行為などできない。頭の中はエッチなことでいっぱいになっていくのに、肝心なあそこが勃起しないと、いよいよ煩惱に支配されることになる。

詩音と今ここでセックスの約束をしたとしても、僕にだって自信がないのだ。それは詩音も同じことで、処女膜が破られる痛みには耐えなければならない。今夜、仮に詩音が処女を捨てる意思があったとして、年齢的には遅いとは思いますが、僕もはじめて処女を相手にしたときは、女性の方が21歳だったから年齢的にも処女を卒業したとしても不思議ではない。

むしろ、今まで箱入り娘だった詩音のことだから、同じようなお坊ちゃんタイプには関心が向かず、僕のようなアウトロー作家に処女を捧げるというのは、精神的な自由を獲得するうえでも大切な儀式なのだろう。だから、わざわざセックスしようかと尋ねてきたのだ。

車は58号線をひた走り、アメリカンビレッジに到着する。もう夕暮れ時とあってたくさんのお客さんと賑わっている。幼馴染であるダブテックの元宮が経営しているハワイ発のコーヒー店でココナッツコーヒーを買った。そして、海を眺ながら詩音と語り合う。

「アキラ、ごめんね」詩音は突然謝りだした。理由が解らず、どうした？と聞く。

「アキラに恋人がいたなんて知らなかったからついムキになって言いすぎちゃった」

「絢香先生のこと？」

「そう」

「彼女は大切な同僚ではあるけど恋人ではないな。気にすることないよ」

「でも、綺麗な人だったね」

「ああ。彼女は恭子さんについてうちの人気ナンバー2だからね」

「正直、嫉妬しちゃった」

「絢香先生に？」

「うん。なんか自由気ままに生きている感じがして、それでいて経済的に自立している」

「まあ、うちの会社は固定給に売り上げからインセンティブが付くから、絢香先生ならけっこう稼いでいるだろうね」

「アキラが一瞬でも好きになっちゃったの解る気がする。恭子さんは太陽、絢香さんはお月様。まるで昭和のアイドルみたいだね」

「太陽とお月様か。であるならば、詩音ちゃんは夜空に輝くお星様だよ」

「それ昔からよく言われる。苗字が星崎だから詩音ちゃんは星だねって」

詩音はコーヒーを片手に遠くの方を見つめてそう言った。僕は詩音ちゃんだったら、この世の全てを手にするスターになれるのになあと思った。

このまま時が永遠だったら良いのと思う。詩音と出会ってからまだ3日目。婚約者という設定で沖縄にきたものの、本当に婚約しているみたいに濃密な3日間だった。

「アキラ、セックスって気持ち良いの？」

詩音の発言に思わず僕は飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。

「いきなり何を言うの？」

「だって、した経験ないから解らないもの。はじめは痛いつて言うけれど、みんなセックスに夢中になるってことは気持ちいいってことなのかなあって。あくまでも想像だけだね」

「若い頃は単純にそうかもしれない。けど、僕くらいの年齢になるとセックスは雰囲気というか、単純にフィーリングが大切なんだよね。イチャイチャしているうちにお互いの気持ちの昂ぶりを抑えきれなくなって、身体を重ねあう。でも、それって今日いきなりセックスする約束したとしてもいざその場の雰囲気が盛り上がらなければそういう関係にはなれない」

「ごめん。変なこと言って雰囲気をぶち壊しちゃったかな」

詩音は潤んだ瞳で僕を見つめる。その瞳の輝きはこの世のものとは思えないほど輝いて見えた。

「詩音ちゃんは僕のことを運命の人だという。けれども僕は琉球占術が専門だから、運命は創っていくものだと教えられている。詩音ちゃんの方が占術師に向いているのかもしれないな。そんなに運命を信じている理由って何か特別な出来事があったの？」

僕の素朴な疑問だったのだが、詩音は運命を強く信じている理由を語りだした。

「こんなの信じてもらえないだろうけど、子供のころにね、不思議な体験をしたの。誰もいないはずの部屋なのに、近くから声が聞こえてきて、あたりを振り返ってみても、部屋を出ても誰もいなかったはずなのに、その声は確かに聞こえていた。たぶん幻聴だったかもしれないんだけど、あまりにその声の内容が当たりすぎるから怖くなっちゃてさ」

「それって、神様からのメッセージかもしれないよね。スピリチュアル世界の人間は異次元の世界の声を聴ける人間のことをチャネラーと呼ぶ」

「なんかラジオを聴いているみたいだったから、チャネリングしてたのかもしれない。けれど、家の百科事典で調べたら、統合失調症という精神病の患者も同じように幻覚や幻聴を見ると書いてあったから、精神科に連れていかれたら大変なことになるなって子供心にそう感じていたの」

「実は僕も幻聴みたいなのは時たま経験する。誰もいない部屋なのになぜか友人たちの声が聞こえてきて、でもそれが妙に生々しい話しというか、身内しか解らない話だから余計に気になって仕方なくてさ。僕の場合は精神科の病棟に入院していたことがあるから、詩音ちゃんの話は信じられるよ」

「それで、その声の内容なんだけどね。わたしは歌をうたうために生まれてきた人間だから、お金のことなどこだわらずに自由になるべきだって言うのよ。でも、小さいころはお医者さんになりたかったから、勉強ばかりしてきてさ。ボイストレーニングも習っていたけれど、歌手になりたいとまでは思ってなかったのよ。でも、親は資産家だし、一人っ子だし、親のいきすぎた干渉からは抜け出したいとは常々考えていた。それで、次第にその声の主の正体も解らないけれど、言うことをきくようになったの」

「なんとなく解る気がする。四六時中、声が聞こえているとだんだん慣れてきて、親しみが湧くから、神様からのメッセージかもしれないって思うこともあるんだよね」

「そうなのよ。これはきっと特別な人にだけ与えられた能力なんだって、思いはじめた

の。私は人の運命みたいなものがお告げとして天から降りてくることがあるの。そして、身内で弱っているひとがいるとどんなに遠く離れていたとしても解る。変な話しだけど、未来が視えるのよ。だから、その能力を人のために使えたらいいなあなんて考えてた時期もあるんだけど、残念ながら、近い人の未来しか視れないの。こんな話しをまことに聞いてくれるのは占い師だけかなあと思ったから、この世界に飛び込んできた」

「占い師の世界には色んな霊力を使える人がいる。科学的には脳の錯覚だと指摘されているけれども、中には本物の人もいると思っているよ。詩音ちゃん的能力は天から与えられた才能だと思う。古来から、音楽家というものは幻聴が聞こえる人が多いとされている」

「私はキリスト教で育ったから、天の声が聞こえるのは良いことだと思って生きてきた。アキラとの運命を信じているのも全ては神様からのお告げだと思っている」

詩音は神の声が聴ける能力があると言った。僕も幻聴が聞こえていた時期があったから、その話しは信じられる。しかしながら、一般的にはとても生きづかったに違いない。

詩音は僕の腕を強く掴んだ。潤んだ瞳で見つめてくる。

「ねえ、アキラ。こんな話し信じられないかもしれないけれど、私にはアキラが大小説家になる未来が視えるの。でも、それはアキラが40歳を過ぎている頃かもしれない。だから、それまでは私がアキラの生活面を支えたいと思っているの」

「僕が大小説家になる？ 嬉しいけれど、想像つかないな。目の前の原稿を仕上げるのにも精一杯なのに。それに、40歳を過ぎてからか。また結婚が遅くなる」

僕は若い頃から結婚願望は強い方だった。しかし夢を追いかけているうちに、女性の方から自然と離れていく。それが道理だと思って結婚を諦めてきた。しかし、やはり好きな人と生活を共にして、子供の面倒を見る、それ以上の幸せなど他に考えられない。夢と現実の狭間において、どうしても諦められない夢を選ぶ。大小説家になる未来が視えるといった詩音の言葉は嬉しいが、僕だって普通に結婚したいだけなのだ。

「詩音ちゃんが言う未来が正しければ、40歳を過ぎてようやく結婚できることになる。僕は結婚して子供を作るのが小説家になるのと同じくらい大きな夢だから、相手の女性は若い子じゃなきゃ無理ってことだよ」

「絢香さんや恭子さんには申し訳ないけれど、占いで見てみてもアキラを支えるだけの強い運気は持っていない。私はアキラを支えるだけの経済力も運気も持っています。だから、信じたいの、アキラと結婚しなさいっていう神様からのメッセージを」

「神様からのメッセージ。僕も占い師になったのは運命の人に出会いたかったからなんだ。占いを通してたくさんの女性を鑑定して、運命の人とでたら結婚すればいいと思ってこれまで占術師をやってきた。もしも詩音ちゃんが運命の人だったら、もうこれ以上、占い師を続けていく理由がない」

「私が最後の女だよ。もういい加減観念して」詩音はそういうとまた遠くの方を見た。アメリカンビレッジはもうすっかりライトアップされて、気持ちの良い海風が吹くと、恋人たちは肌を寄せ合う。詩音との距離が近くて、彼女の髪の毛の香りまで嗅げる。遠くのほうに観覧車が見えて、横浜みなどみらいの風景を思い出す。

はじめて自分の方から女性に好きですと告白をしたいつかの休日。二人とも飲食店に勤務していたから、シフトがバラバラでこうして二人きりで遊ぶようになったのも僕が転職活動をするようになってからのことだった。僕は正社員じゃなかったから、派遣社

員としてはむしろ好待遇で、まだ若かったが手取りで30万円も貰うことができた。しかし、所詮派遣社員だから、経営状態が悪くなるといつでも契約をきられてしまう。案の定、バブル崩壊の余波を受けて、ホテルの経営状態は悪くなり契約を打ち切られた。そのころ、たくさん夢があった。音楽の道でプロになるためにギター教室に通い、これからの時代は英語くらい話せなければ通用しないと英会話スクールにも通っていた。実家暮らしだったから、稼いだお金は趣味に使ったとしても、勝手にお金は貯まっていた。はじめて女性を好きになったことも、もう23歳という年齢だったことを考えれば遅すぎる初恋だった。大学に進学していたとしたら、社会人一年目。僕は貯まったお金で一人暮らしをすることにした。友達が紹介してくれた物件は、6畳一間で風呂なし、トイレ共同という昭和の貧乏アパートを代表するような造りだった。横浜のみなとみらいで、あなたのことが世界一好きです、と素直な気持ちを告白した時、現在と同じように、夜景をバックにして観覧車が遠くの方で揺れていた。港の水面はキラキラと輝きを帯びて、潮風が吹くと少しだけ肌寒かった。桜が散った後の5月の横浜みなとみらい。彼女には好きな人がいることも解っていた。しかし、この小さな胸に咲いた一輪の花を大切に温める様に、僕はいつまでも待つと伝えて、横浜から蒲田に帰ってきた。彼女は銀座の人気イタリアンのお店に就職が決まっていて、春には東銀座へと引っ越してくる予定だった。僕が引っ越したばかりの風呂なしアパートには、連日友人たちが遊びに来て、まったりと喋って帰っていく。一方で、東銀座の新築マンションに引っ越した彼女は、周囲に友達もいなくて寂しい思いをしていたに違いない。僕たちはお互いになにも惹かれて、彼氏彼女という関係性になった。

そんなことをふと思い返し、隣にいる詩音を急に抱きしめたくなった。こんなにも愛おしくて、可愛らしい詩音のこと、裏切れるはずがない。初恋は実らなかったけれど、こうして、また、はじめての経験をさせて貰っている。詩音の純粋無垢な心は、まだ恋というものに対しての免疫がなく、生まれて初めての経験を共に潜り抜けてきた。

詩音はスーパーセブンを腕から外し、夜空にかかげながら瞑想をはじめた。きっと、新月にも同じような願いことをしたに違いない。処女を失う。初めての夜になるだろう。もう、占いのこととか、相性の話とかどうでもいい。現在は、夜風に吹かれながら、祈っている。大切な人たちが幸福でありますように、世界に平和が訪れますように、そして、詩音と共に、この先もずっと長く仲良くいられますように。

僕は詩音の腰に手を回して、抱き寄せた。突然のことでびっくりした彼女は、頬を濡らしながら、アキラの音が聞こえるとつぶやいた。きっとこんな気持ちになれたのも占術のおかげかもしれない。僕たちは運命という名の激流に翻弄されながら、初めて一つになった。キスをする瞬間、詩音は無言のまま瞳を閉じた。それは、愛しているの言葉よりも重く、責任という言葉がのしかかった。こんなにも愛しているのに、なぜか刹那くて、過去にお付き合いした女性の影を振り切るかのように、唇を突き出し、舌を絡ませた。ぴくっと詩音の身体が反応すると、優しく腕を緩めて、彼女の髪の毛を撫でながら、耳にキスした。この世界の中で、例え詩音の親から反対されたとしても、彼女との誓いを守りたい。

それは、僕が大小説家になるという夢。何を持ってして大小説家というのかはわからないけれども、彼女が聞いた神様からの予言が実現できるように精進していだけだ。

「詩音ちゃん。この世の誰よりも愛している」僕は詩音の耳元に囁く。

まるで、樂園を追放されたアダムとイブみたいに、神様の逆鱗にふれたとしても、その誓いは永遠のものだと信じたいのだ。今夜、詩音の処女膜は破れる。新たなる生命を宿すための神聖なる儀式だ。9月13日、詩音の23回目の誕生日は僕と詩音がはじめてであった記念すべき日になった。その日は新月だった。もうこれ以上、女性からモテることを考えなくてもいい。僕と詩音が出会って3日目。美しい三日月が夜空に浮かんでいる。

「アキラ、もう何も言わなくていい。このまま私を連れ去って欲しい」詩音は瞳を潤ませて愛していると言った。人生において誰にでもあるはじめての経験。夜空は不思議なくらいに綺麗に見えた。肩を寄せ合う詩音とのこれからの物語はエキサイティングでミステリアスで、知的好奇心の赴くままに、風の流れるままに、旅するように楽しい思い出を創っていけるはず。僕の心は今までにない以上に澄み切っていた。きっと、幾多の試練を乗り越えてであった最高のパートナーである詩音と正式にお付き合いを決めた瞬間だった。

新宿占術師アキラとレヴィン2 ～G線上のマリア～

著 橋本 昂祈

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
